明治三十年三月十六日發行

女鑑



第百二拾[illegible]號

東京國光社

女鑑第百二十八號

目録

宮簀姫



驚くべき一怪報

此の頃、婦人弘道叢記の時報を見たるに、米國に一婦人ありて、自ら華盛頓州より選出せられて、元老院の議員たらむと企て、あられもなき婦人の辨舌を打ち振うて、此所に彼所に、あさましくも國政をのゝしりあげつらひ行くありといふ怪報あり。異國の事にしあれども、聞くより、誠に驚かれも慨れもする醜体怪事にあらずや。これ、蓋し、婦女子をして全く男子と同一の地位に立ち、同一の生路を踏ましめむとする彼の異國の社會の弊風の、終にかゝる婦人の醜体をも演ずるに至りたるものならむ。

元來、女子は社會に於ける境遇は、斯の如く全く男子と全じうするを得べきものなりや、否。斯くの如く全く同うすべきものなりや。吾人は、決して男女は斯の如く同うすべきものにあらざることを云ふ者なり。女子は男子より尊からず、

男子は女子より賤しからず、男女が間に尊卑もなく優劣も無き事は、吾人が決して疑はざるものなり。されど、女子が總て男子と異る所なく、全く同一の職業を取り、全く同一の生路を行くの、天理に悖り生理に背けることなる事も、また、吾人は決して疑はざる者なり。

われ〳〵人種を保存すべき道の上にても、女子が盡くすべき職分の、男子よりも殊なるものある事は、今更に云はずもあれ、先づ、女子の躰格を見よ、女子の力量を計れ。さては、女子の腦力、女子の神經、女子の心胸、女子の性情を考へ見よ。男子とうち並べては、大に異る所あるにあらずや。されば、さばかり身体性情を異にするものが、いかでか同一の職業を取り、同一の生路を行くを得るものならむ。否、いかでか同一の職業を取り、同一の生路を行くべきものならむ。

男子と女子との身体性情の異なれる所は、やがて、また、自ら男子には男子たる美徳あり、女子には女子たる美德あらしむるものにして、實に、女子の性情身体の、男子に異れる所あるによりて、自ら温和に柔順に、やさしくして正しく、正

しくしてすなはなる優に美はしき女子の美徳は存ずるなり。されば、能く女子の身体性情に適ひて、能く女子の此の美徳を損なふことなく、能く女子の美徳をしていよ〳〵明く美はしく高くめでたからしめむやうなる職業を勵み、生路を營むべきなりかし。

しかのみならず、われ〳〵人間は、神にもあらず、佛にもあらず、萬能の者にあらず。萬づにめでたく優れてあらむことは、とてもはかなはぬことなり。これ、やかて、社會は分業といふものの行はれ來りてより、一藝の達人出で、一科の名工あらはれ、一門の名士も來り、一道の大家も作り出だされ、遂に百科の學藝、萬般の事物、いよ〳〵美はしく進み行きて、今日のめでたき社會を作るに至りたる所以なり。

思ふに、男子と女子との身体性情を異にし、各其の美徳を殊に爲すものは、自然に既に、男子と女子とは、相分業して世に立つべく、而して、各其の職務を相勉め勵みて、世に相補け行くべきものなるを示せるものなり。實に、男子と女子と

は、相依りて、相携へて、共に一家を營み治め、子孫を計り養ひ、さて君に仕へ國につとめ、社會に盡くすべき者なれは、各能く其の身体性情の適せる所を務め勵み、各々能く其の美德の存する所のものを以て、彼此相補ひ、內外相助け、左右相携へゆきて、能く人間の職分を遂げ、誠の人生を行くべきなり。されは其の本性に背き、其の美德を忘れては、何を以てか女子の職分を盡くすを得む。吾人はこれを以て、女子には必ず男子に異る道あらしめむことを欲するものなり。



論說

女學生ニ望ム(續)

勝浦鞆雄

抑、外ニハ對スル國ナカリシ時代ノ我ガ國ト、世界ニ對スル樣ニナリシ今日以后ノ我ガ國トハ、女子ニ於テモ、其ノ用意ニ於テ、大ニ差別ナカルベカナズ。娘等ハ、我ガ

國史ノ精華トナレル娘等ガ、祖先ノ行爲ニ現ハレシ忠孝貞順ノ諸德ハ、將來益々發揚セシメテ、世界ノ標準タラシムル事ニ力ムベキト倶ニ、第一ニハ、從來婦人ノ常習トナレル退守的ノ思想(即ちひかへめにする)ヲ破リテ、進取的ニ更メザルベカラズ。此ノ語或ハ語弊アルベシト雖モ、余ガ進取的ト云フハ、サシ出ヨ、れてんむナレヨ、ト云フ意味ニハアラズ。奈何ニ社會ハ改マリヌトモ、婦女ハ、可及的婉娩貞淑、即チしとやかニシテ、タヽシクオトナラシキヲ要トスレド、其ノ中心ニ至リテハ、優柔ニ失スル弊ヲ踐マズ、剛毅ニシテ怯レザル、獨立ノ精神ヲ備ヘヨト云フナリ。第二ニハ、娘等ノ祖先ノ間ニ於テ、既ニ發進シ來レル忠孝貞順ト云フガ如キ(君國又ハ親夫等ニ對スル)諸德ノ外ニ、特ニ修養スベキハ、社會トカ公衆トカ云フ者ニ對スル德誼ナリ。此ノ德ハ、憲法ノ下ニ立チ、町村自治ト云フ制度トナリシ今日以後ノ國民ニハ、最必要ナル德ニシテ、今日以前ノ我ガ國ニハ、尙十分ニ發達セサリシ德ナリ。將來ノ國民ヲシテ此ノ德ヲ修養セシメントスルニハ、先娘等ノ頭腦ニ、十分ナル印象ヲ與フル事ヲ要スベシ。娘等ニシテ、此ノ德アラシメバ、其ノ子孫タラム者ハ、無論ソノ遺傳ヲモ承クベク、敎訓ヲモ得ベケレバナリ。社會ニ對スル公德ト云フ語ハ、尙允當ナラサルカモ知ラネト、其ノ事例ヲ手近ク指斥セバ、學校ノ器什ヲ重シテ之ヲ鄭重ニ取扱フモ、辻

便所、又ハ道路等ヲ清潔ナラシメテ汚損セサラシムルモ、他ノ樹枝草花等ヲ妄ニ折傷セサルモ、公同ノ會議ニテ決シタル事ハ、假令異見アリトモ、力メテ服從シテ之ニ違背セザルモ皆社會ニ對シテ務ムベキ一個人ノ重要ナル德誼ナリ。サスガニ自治ニ慣レシ故ニヤ、歐米人等ハ、一個ノ德誼ニ比シテハ、此ノ種ノ德誼ノ方大ニ發達セルガ如シ。(是彼我ノ歴史ニ差アリテ然ルヲ致セルニハアレド)余ハ、外國人ヲ見習ヒテ、之ガ眞似ヲセヨト勸ムルニハアラズ。我ガ國ノ制度ガ、二十三年以來一變シタルニ伴ヒテ此ノ種ノ德誼ヲ修養スルコトノ緊要ナルコトヲ信ズレバナリ。加之、條約改正ノ結果ハ、遠カラズシテ、此ノ種ノ德誼ヲ重ンズル外人等ガ、自由ニ內地ニ入リ來ラントスルニ至レリ。彼等ガ碧眼ニ、我ガ國民ハ、此ノ種ノ德誼ニ欠クル事ノアリト映ジナバ速了ニモ、未開トカ野蠻トカ云フ酷評ヲ下サズトモ云ヒガタシ。モシカカルコトアリナバ、一個人民ノ不注意ハ、直ニ國威ニ關係ヲ生ズベキ恐ナシト謂フベカラザルナリ

第三ニ注意ヲ要スルハ、娘等ガ自己ノ身體ニ對スル修養ナリ。今日ノ娘等ハ、三十年前ノ少女ノ境遇ニ比スレバ、日々ニ修ムベキ學科モ多ク課程モ忙シケレバ、其ノ腦漿ヲ使ラスヿ甚ダ大ナリ。カツ心ヲ勞スル事多クシテ、一身ノ營養ニ疎ナルコトノアルハ、利殖ヲ謀ラズシテ原金ヲ支消スルト同理ニテ、遂ニ羸弱多病ノ人トナラズト云フ

ベカラズ。娘等ノ身體ノ健康ナルト否トハ、未來ノ多數ナル國民ニ映響スルガ故ニ、其ノ不幸ハ、決シテ娘等ガ一身ニ止マラズ。故ニ其ノ眠食起居衣服等ニ深ク注意スルハ勿論、學校ノ來往ニハ、一切送迎ノ車ヲ廢シテ、必徒歩スルコトトナスベシ。三食外ノ間食ヲ廢スベシ。余ガ見ル所ニテハ、婦女ハ何トナク腰ヲカヾメギミニテ、姿勢ヲ正クスル者少キガ如キ感アリ。（なりふりトカ見エトカ云フ方ノ批評ハ余之ヲ知ラズ）行歩ノ際ハ元ヨリ、奈ナル仕事ヲナス時ニモ、脊骨ヲシテ彎曲セシメザル習慣ヲ得ムト力ムル事ニ注意アリタシ。脊骨ノ彎曲ハ、往々不治ノ病ノ源因ヲナス事アリト聞ケリ。第四ハ勤儉ノ德ヲ修メン事ヲ要スルナリ。今日ノ社會ノ大勢ヲ見ルニ、其ノ生產ノ力ハ、近來奈バカリ增加セシカハ知ラザレド、飲食住居ヲ始メ、人事百般ノ浮華ニナリシコトハ都鄙トモニ驚クベキ者アリ。余ノ鄕友ノ、獨、佛ニ遊學セシ者アリ。歸朝ノ後常ニ彼ノ國民ノ勤儉ニシテ質美ナル事ヲ嘆稱セリ。古今東西勤儉ハ興隆ノ基ニシテ、驕逸ハ衰亡ノ素ナラザルハナシ、殊ニ一言注意ヲ要セムトスルハ服裝ナリ。少時ハ固ヨリ他日世ニ立ツニ至リテモ、可及的麗衣艶服ヲ避ケムコトヲ望ム。風俗ト云フ者ハ、或場合ニハ、其ノ人心ヲ移ス者ニシテ、又大ニ人心ヲ表現スル者ナリ。娘等心ヲ潜メテ良家ノ子女ヲ觀ヨ、時樣ヲ逐フニ汲々タルヿ、渇者ノ飲ヲナスガ如シ。娘等

ハ知ルヤ否。時樣ノ源ハ多ク如何ナル種類ノ者ニアルカ、聞ク所ニ依レバ、彼ノ媚ヲ賣リ愛ヲ販キ、甚シキハ人道ニ背ケル行爲ヲ以テ其ノ營業トスル賤妓輩ノ好尚ニ源因スト。宜ナルカナ、良家ノ子女ト彼ノ賤妓トハ、余等ノ眼ニハ一見シテ識別ニ苦ムコトヲ、カヽル現象ヲ見テ、娘等ハ倘時樣ヲ逐フコトヲ人ノ榮譽ナル行爲ト思フヤ否。(多數ナル貴族大官ノ令閨ノ內ニハ、舊ハ賤妓ナリシモアル由ナレド、夫ハ人世ノ變例ニシテ、娘等ノ眼中ニ留ムベキコトナラズ)娘等ハ娘等ガ眞面目ヲ失ハズ、可及的清楚ニシテ高尚ナル風ヲ保タンコトヲ要スベキナリ。余ハ本校ノ如キ、府下有數ノ學校ニ於テハ、特ニ風俗改善ノ模範トナルベキ必要ヲ感ズルナリ。是、娘等ガ父母姉妹ト謀リテ、特ニ注意センコトヲ望ムナリ。

以上ハ、我ガ國ニ於テ、古來發達ヲ遂ゲタル特別ナル女德ヲ、益完全ニ發達セシメ、將來要スル所ノ女德ハ、大ニ之ヲ修得シテ、明治昭代ノ婦人タラン資格ヲ備ヘラレンコトヲ望ミ。併セテ、女子ニ就キテ注意ヲ要スル一二ノ條項ヲ陳述セシナリ。娘等幸ニ聽取シテ考察スル所アラバ幸甚ナリ。

(完)

女子教育一斑（三十六）　三輪田眞佐子

第三　衣服

人は何を以て衣服を纏ふか、言ずして誰も知らむ。一に、内は躰温を保たんため、外は邪氣を妨がんための必要によるなり。二に、自ら醜体を見せざらまじ、人に非禮を責められまじとの念慮によるなり。されど、今日女子の衣服につきても、この必要に應じ、この念慮に適ふものを撰ぶべきなり。

こを以て衣服は、なべて衛生の道を離るべからず。然るものを、大方の女子は、虚飾にのみ心を馳せて、衛生上の利害を顧ざるが如し。元來身体には、緒帛より綿布こそ適當なるものなれとの説あるに、綿布を賤しみて實際に纏ふことを好まざる傾きあり。上衣を絹帛にて作るは猶可なれども、膚着は、必ず綿布若くは毛布を用ゆべし。わきて、女子の襦袢等は、ろの襟、若しくは袖なども、一種の装飾を兼ぬるを以て、洗濯なども、男子のものゝごとく容易ならざれど、一層注意して不潔にならしむべからず。衣服は、姿勢に適合し、屈伸に自在なるこそ衛生にもよからんに、女子は形容を飾ることにのみ流れて、細腰の姿こころあらまほしと、故ら帯を常ならず引きしめ、あるは襟を背につきなど、身体の自由を束縛する傾あり。此等は深く意を用ゐて、ほどの宜しきに止るべし。孔夫子は、右の袖を短くなせしとかや。聖人の心事知るべきなり。蓋し女子の衣服は、優美を欠ぐべからず。實用及び便利などを尊ぶこと度を過さど、雅

致の趣を失ふ恐れあり、愼むべきことにこそ。ある人曰ひけらく、日本の女子の帶は、その幅いと廣きを以て、これを結べば窮屈を感じ、身体の害となるべしと。おもふに、錦織の帶などを、本幅のまゝ結べば、聊か苦しからんも今の女服にては帶こそ裝飾の主なるものなれば、衣服の風体を改めざる限りは、狹き帶の流行を催すべからず。唯衛生に注意して鹽梅をはかる外ぞなき。

おのれは、日本女子の衣服は、可なり、優美なりと信ずれば、獨り起居につれて裾の翻へり、風立つ日戸外に出づれば、翩々と飛びかひて、足部の見ゆる恐あり。故に往時用ひし女袴を着すれば良からんと思ふ。現におのれは、幼きころ、常にこれを穿ちける經驗あり。今日女學校の生徒にこそと望むなり。まことや、女子にして、膝の見ゑ下着の出づるは禮にあらずかし。若しその禮を全くせんとならば、その一擧一動心労りするわざなれば、おのづから身體の圓滿を害ふならん。由りて、おのれは、女學校の制服につきての參考にもがなとかくなん。

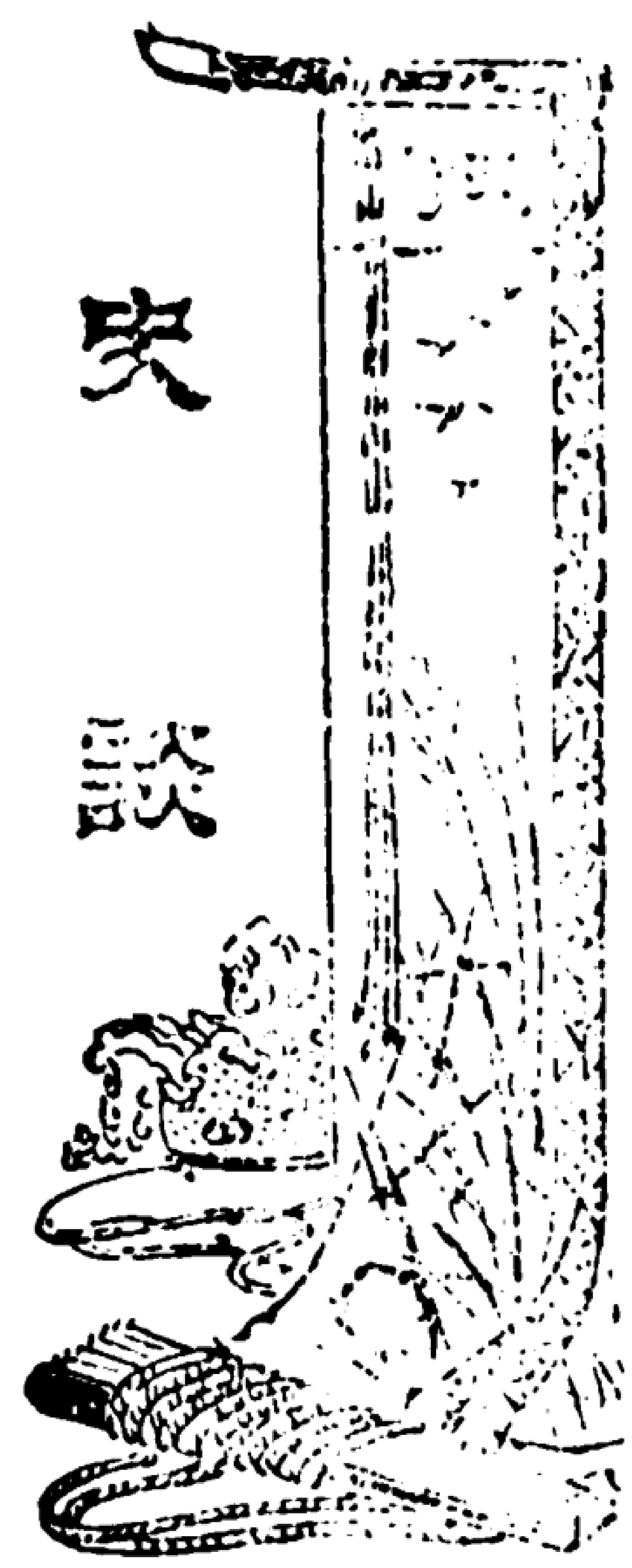
おもふに、國民の服制は、その國の國粹、及び獨立を表はすに足るものなれば、徒らに外つ國の女服に擬ふべからず。もしわが女服に完全ならざる所あらば、これを修正すべし。決して、おのづからなる良風を沒滅すべからず。さきつころ、御國の大事に

つきて、女子の服飾をおもふこと淺からざりけり。

第四　身裝　以上の如く女子體育は、その衣服につきて、影響すること多きのみならず、肉身の文飾に就きても亦關係すること少からず。などか忽におもふべき。故に、おのれは、衣服の外にして、身體に屬用する品を、便宜上身裝なる文字を假りて述べん。

頭髪は時々洗ひて清潔に束ぬべし。夏時など、よからぬ臭氣を放つは、婦女の恥辱のみかは、衛生の害ともならんかし。白粉を施すは、一般の風習なれど、こは皮膚を害し、衣襟を穢す恐あれど、少量に用ふべし。こを多量に用ふるは、反りて淺ましと見劣りせらるゝものなめり。齒を鐵漿にて染むるは婦人の常なれど、そがため口中の不潔を招くときは、害あるわざにこそ。おのれは、深く國風を尊ぶものなれど、慮りて害を釀し、以て國風の誹らるゝを聞くに堪へざるなり。

その外、下駄なども、重きに過ぎ、歩行に便利ならざるもの。あるは、形體を奇趣にせんとて、穿つに危きものなどはあしかりなん。鬢髪の香油なども、衛生上心すべきふし多けれど、これらを逐一ものせんは、煩しければ、省きつ。讀者以上二三の例もて他を推知し給ひね。



宮簀姫

鹽井ふく子

弟橘媛のかぐはしき操は、あまねく人の知る處にして、女鑑にもとくものされたり。それも日本武尊の御妃。之もまた日本武の尊の御妃。それも世に尊き節女、之も亦世にめでたき貞女、げに、日本武尊は、やさしき、うるはしきやまとの花どもを、あつめもち給へるやんごとなき神の御子にはましましけるよ。

誠や、日本武の尊、十八歳にして、熊襲建建兄弟をうち給ひ、山の神、河の神、穴戸の神、穴海、柏の惡神どもを斬り従へ、西國をしづめ給ひしより、十年にあまる年月天下事なかりしを、いつしか、またも東國の夷ども、さわぎ立ちて、邊境のゆゝしき亂れとなりけれど、帝また日本武の尊に仰せて、之を討たしめ給ひぬ。尊、大命を承り、速に東國に赴かんとして、まづ伊勢より尾張に出でまし、その國の國造、祖建稲種の命の家に入りましぬ。

宮簀姫は、すなはちその國造の妹なりけり。尊、此の家に入りまし、此の媛をはの見そなはして、愛でたう思ばされ給ひ、歸りのぼらん折り召さむと契り給ひて、東へと出で立ち給へり。

さて、尊、國造の家を出でまして、駿河國に至り給ひ、そこの賊どもを狩り掃ひ、相摸より上總にわたり給はんとしたるとき、橘姫は皇子にかはりて沈みませるとなり。

さて、皇子は玉の緒つゝがなく上總につき給ひ、陸奥にいでまし、御舟に大鏡をかけて、海路より葦浦をまはり、横に玉浦をわたりて、蝦夷に至り、夷人どもをこと〴〵くうち平げ給ひて、尾張に歸りまし、契りおき給ひし宮簀姫のもとに、入り給ひしに姫、よろこび迎へ奉りて、いとねもごろに御軍の御勞れなどとひ慰め給ふ。

皇子、その家に久しくとゞまりて、其の家を出でさせ給ふ時に、彼の草なぎの靈劍をとき、媛にわたへての給はく、我れ京に歸らむ、必ず汝を迎へむ。この劍は神なれば持ちいつきて、吾が床の守りにせよとのたまひわたし給ひければ、その時、大伴建日の連、諫め奉るやう、これより都へかへりまさむ路もいと遠し。ことに伊吹の山にはあらぶる惡神のありと聞き及び候、御劍のみ光りにあらずば、いかでかあやしき毒氣をはらはせ給ふべき。必ず大王、御劍は御腰にはき行かせ給へと云ひけれども、皇子更

にきかせ給はず、何にさる事のあるべき。たとへあらぶる神の住まふとも、わが此の足をあげてふみ殺してむとの給ひ、御劒を宮簀姫のもとに置きて上り出でまし、遂に伊吹山の毒蛇の毒にあたりてやみまし、伊勢の能煩野と云ふ所に至つて、遂にはかなく草葉の露と消えさせ給ひぬ。御年三十二、いまはとおぼし給ふとき、

をとめの、床の邊に、わがおきし、
　　つるぎの太刀、そのたちはや

と歌ひ竟てかくれましぬ。此の事、京に聞えければ、倭にませし后等、御子ども、夢かとばかりに驚きかなしみ給ひ、みはかの四方をとりまきて、ふし沈みて泣き給ひしとぞ。

宮簀姫もかくれましゝことをきゝ、悲しみ給ふ事限りなく、遂にありし契を忘れず、御床を守り、神劒を大切にいつきまつりて、終始をこたりなかりしが、年老いぬればとて、一日やからをつどへ、一つの社を建てゝ、神劒をまつらんとはかり、その地を定めつるとき、そこに立ちたる楓の木の一本、おのづからやけて、田の中に倒れつるに、其の田久しくあつかりしかば、熱田の社と名づけられしとぞ。

それはともあれ、やさしき、姫のあつきかしづき、橘姫にもならびたるかぐはしき貞

操にこそ。

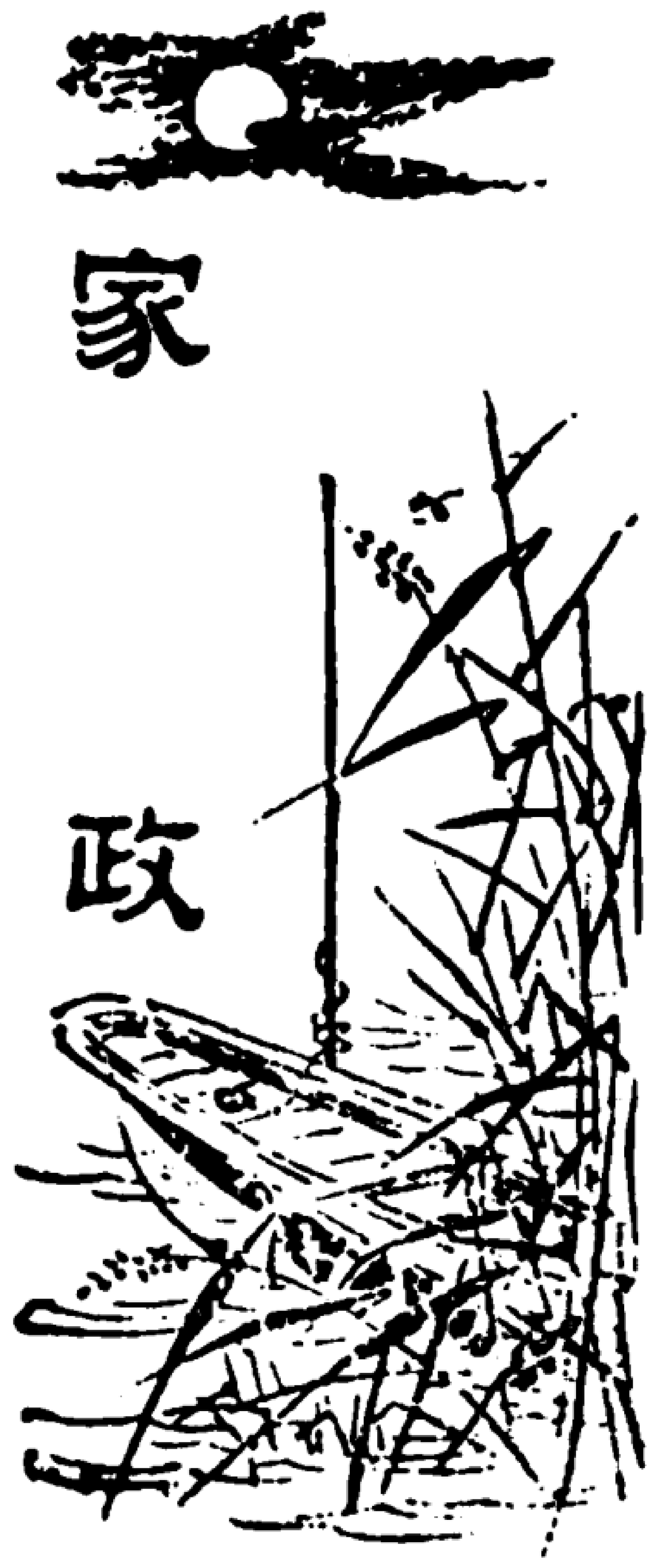
忠五郎が妻の事

薫風仙史

むかし出羽の國、置賜郡、中和田といふ村に、忠五郎といへる農夫あり。妻は近隣の郷の生れなりしが、其の名をしらず。年十五にて忠五郎に嫁きて、一人の子を生めり。後二年を經て夫癩病にかゝりて、手足面まで爛れくづれて、きたなさいはん方なし。舅姑すらもいみ嫌らひて、寄りもつかず。妻ひとり厭ふ心もなく晝夜を分たず附き添ひて、看護に怠なし。夫忠五郎深くその心の懇切なるに感じて、いひけるやうは、吾この疾にかゝりてよりは父母すらもなほいとひきらひて近づき給はぬを、汝が志の厚きほどは身うせつとも忘れじ、去かれども我が病日に重りゆけば、命うせなん日も遠からじ。汝はいまだ年もふるきにあらず。吾今婚を絶たんに、汝が身の他に適きて落ちつきたらんを見なば、我が心も落ち居つべし。吾死なばいさゝかにても香花を手向けてよといひて涙雨とふるを、妻も亦ひたなきになきて、しばしは言葉もなかりしが、やゝありて、なみだながらにいふ、一たび夫婦となれる上は、たとひ如何ばかりの艱苦にあはんもいかでかは恨とおもはん、妾もし去なば、誰ありてか、君が病を看護せ

ん。まして子さへあるを、今婚を絶ち給はんとは、いかにうたてき御心ぞといふを、夫も亦更に涙をおとしていふ。さらむ吾まけんに、汝がおもふまゝにせよとて過しゝが、後いくほどもなくて、夫遂にはかなくなれり。妻かなしみなげくことおはかたならず。舅姑相はかりていはく、我子の婦よく病夫を看護しておつることもなく、はた余らに孝を盡す、今忠五郎みうせつれども、郷里にかへさんこと本意ならず。養ひてわが女として、再他家に嫁がせてん、孫をも、乳母をやとひて育してんといふを、婦きゝて、うちなきて、妾この家に嫁つぎて、舅姑をもて父母とす。再他家に嫁がんこと理ともきこえず。はた夫の君いまはになりて、妾に言葉をのこして、よく舅姑につかふべきよしをいへりき。今より後、夫の君にかはりて、孝養をつとめ、かつ、この子を育し上げんこと妾が願ひこの外にはなしとて動かねど、舅姑も其の貞節に感じて、いとよく目をかけてしに、其の子人となりては、母にたぐひて、よき人となり、家をつぎて、郷の長となれりきとなん。そも〳〵女の人に嫁ぎて、家富足らひ、命ながくして、子孫さかゆるは順境にして論なし。この忠五郎が家の如きは逆境なり。逆境に處してこそ人の心の奥はみゆれ。さるを世には、身を順境におきながら、我から身をえ保たずして世に耻をさらすものなきにしもあらず。ふかく心じて鑑みるべきにこそ。

家政



たちぬひ

西山たい子

(六十五) 白無垢の裁ち方

白無垢は、綸子、羽二重などの類を用ゆるものにて總模樣の下に着するものなり。

之は一匹にてたち、表より裏まで通しにするなり。

まづ裏表の袖都合四つぶりをとり、胴も表と裏との丈けを合せて、二つぶりに長くしてたち、殘りを衽の裏表、襟の裏表とにするなり。

その圖

丈け 五尺七寸 ／ 仝 ／ 仝 ／ 仝

都合袖丈けぶり二丈二尺八寸

表身衣丈け 四寸四寸 ／ 裏身衣丈け 五尺

右に同じ

表衽 四尺二寸 ／ 裏衽 四尺五寸

襟

片々となりてわづらはしけれど、よろしく圖に合せて裁つべし、寸尺は人々の意にまかせて裁つべし。二つ重ぬるには比翼と云ふものもあり。それは切れも少くて出來るものなり。次回に於てそれはものさん。

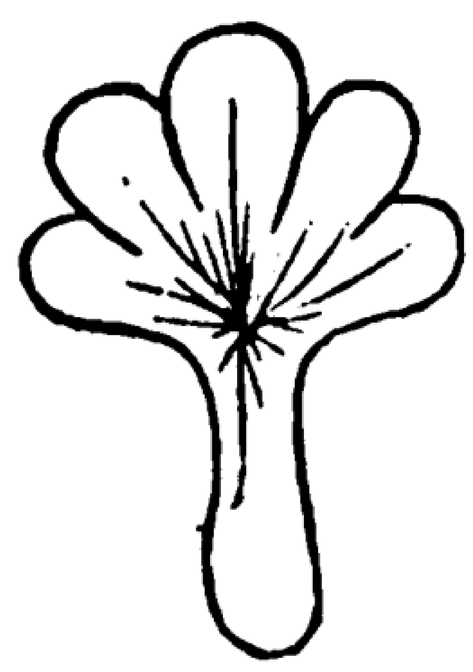
造花

共立女子職業學校教授　伏見藤三郎

菫

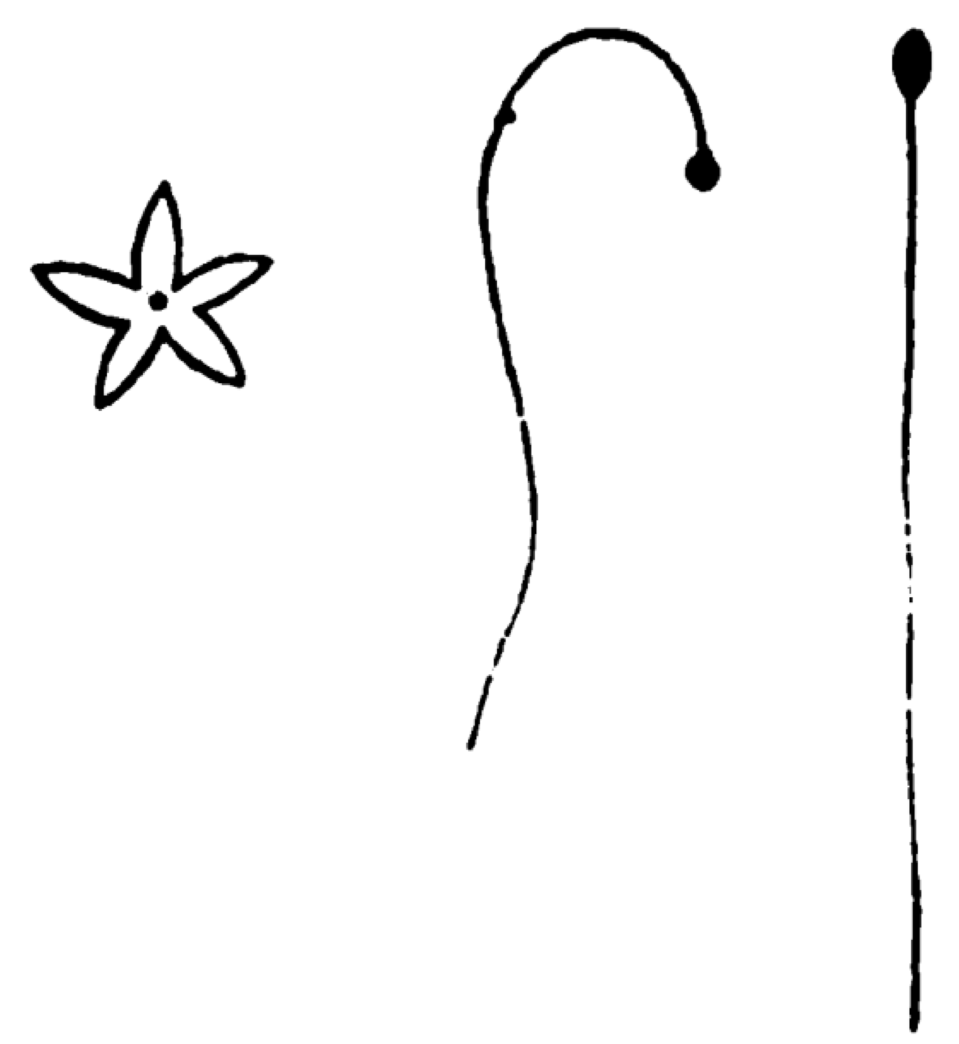
滿開花の造り方　花瓣は、羽二重、又は寒冷紗を用ゐて、はじめ第六十三圖の如き形に之を斷ち、のち「ビオレット」にて元を淡く先を濃くぼかしに染め、乾して又「ビオレット」をはじより少しく濃くして、圖に示める如き筋をかき、后鏝をあつべし。先づ花瓣をうらがへして、瓣鏝の小にて圖に示せる、きり込みの兩端を引き、皆かくの如くして、花瓣の中央は縱にすぢ鏝にて引き、元の長き處を脊後にその反らすべし。莖は第六十四圖の甲の如く、細き針金の先に少しく綿をつけ、之を「レモンエルロー」にて染め、はり金には靑紙を卷くべし。此の先にのりをつけ、こ花瓣の中央をこのはりがねに通し、后より萼を通すべし、萼は靑紙にて第六十四圖の丙の如き形にきり

第六十三圖



たるものなり。蕚をつけ終りたれば、第六十四圖の
乙の如く、之を曲ぐべし。

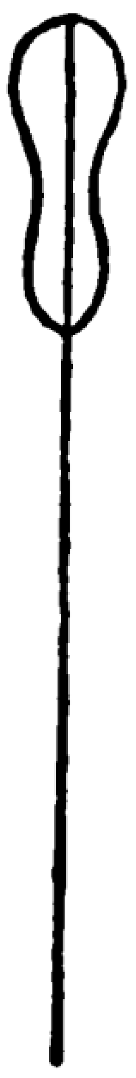
第六十四圖



半開花の造り方　は、滿開と大異なく、たゞ花瓣の
表より鏝をあて丶深く窪ますなり。

蕾の造り方　は第六十五圖の如き形にはりがねの先

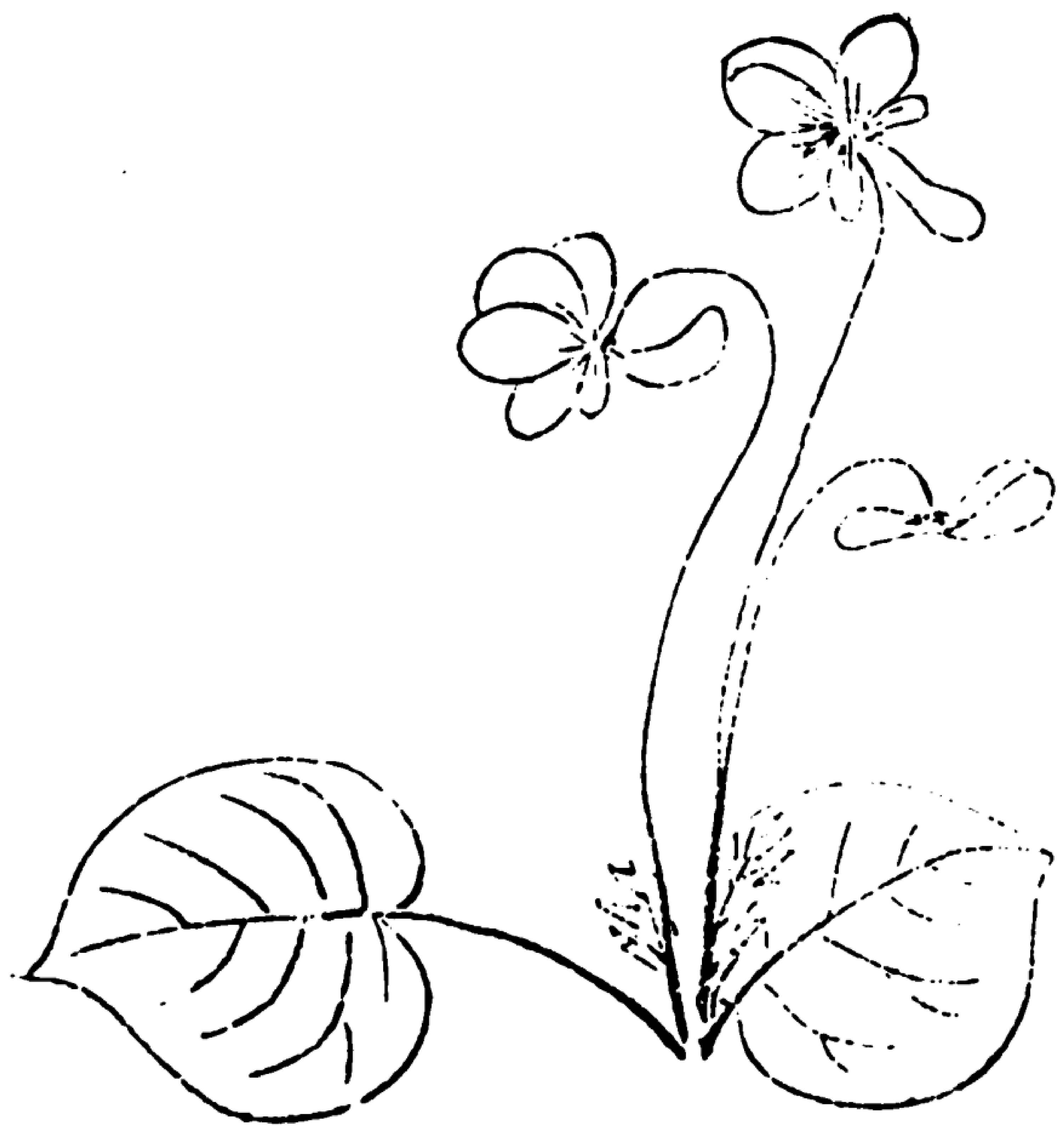
第六十五圖



に綿をつけ、其の上を雁皮紙にて包み、莖には靑紙
を卷くべし。

葉の造り方　葉は第六十六圖を見合して適宜の大さ
に寒冷紗をたち、之を「マセンダ」五厘「オウラミ」五
分「グリン」一分五厘を合せ明礬少許を加へたる液に
てそめ、筋は實物を見合して適宜に付く。この葉の
裏よりはり金に靑紙をまきつけたるものを付けて莖
となすべし。又花の莖の根には第六十六圖に示せる
如く、芽葉の如きもの生したるあり。これは靑紙にて
この形にたちて付くるもよし。

第六十六圖



だいどころ

馬鈴薯の油煎方

馬鈴薯を能く洗ひ、皮を薄く剝き、厚さ二分位に切り、油煎鍋に、牛脂を十分沸し、其の中に投じて、薄褐色になりて、泡あがるまで揚げ、孔ある金杓子にて掬ひあげ、洋紙の上に取りて乾かし、少量の胡椒、食鹽を糝布け、脇付け、又は肉類の妻として用ふべし。

又、此薯を、全油煎にせんには、先づ之れを煠で、能く冷し、皮を剝き鷄卵のときたる中に投じ、其の上に、麵包屑粉を塗して、沸騰ちたる牛脂の中に投れ、度々反して薄褐色になるまで油煎、能く、乾かして皿に盛り、能程の食鹽をかけて出すべし。

次は、薯の團子油煎なり。之れを製せんには、先づ一斤の薯の皮を剝き、煠で、水氣を乾かし、之れをよくつき碎きて、能程の食鹽、及胡椒を和して味をつけ、更に七匁の牛酪と、一個の鷄卵の蛋黄を加へて能くかき交せ、一寸五分位の團子にまるめ、之れに米利堅粉をまんべんなく糝布け、其の上に鷄卵をときて塗り、之れをパン粉の中に投じて、ひらなきやう、其の粉を塗し、牛脂肪にて薄褐色になるまで油煎し、洋紙の上にとりて、脂肪氣を乾かし、皿に盛り、二寸位にきりたる洋芹の若芽を少許添て、冷ざる中に出すべし。但し、強からぬ火にて、凡十分間、徐に油煎るをよしとす。然なくば、衣は黒褐色になるも、薯は心まで火の通らるざることあればなり。

洋芹の油煎方

洋芹は、唯肉類を盛りたる皿の飾りに用ふる爲めに、脂肪にていためることあり。之れを煎付けるには、能乾かし、水氣を去り、牛脂肪にて凡そ一分間程煎付け、銅線篩の中に、洋紙を敷き、其の上にとり、篩を遠火にかざして、脂肪氣をよく乾かしたる後用ふべし。



學園

日本文典（二十七）

鹽井正男

十一　未來助動詞

これは、動詞を助けて、其の事物動作の未來なる意をあらはす詞にて、前にあげたる過去助動詞とは、故に反對の意をあらはすものなり。これには、「む」といふ詞あり。

「む」、この助動詞は、毎時、動詞の將然の格の下につきて、此の未來の意をあらはすを得るにて、例へは、「明日行かむ。」「花を見む。」などいふにて知るべし。其の語尾の變化、やがて活用するさまは、

終止	連体	已然
む	む	め

將然と連用の格とは見ゑず。

秋霧は今朝はな立ちそ佐保山の
　　はゝその紅葉よそにても見む
萩の露玉にぬかむと取れば消ぬ
　　よし見む人は枝ながら見よ
こむ世にもはや成りななむ目の前に
　　つれなき人を昔と思はむ
わが如く我を思はむ人もがな
　　さてもや憂きと世を心みむ

此の「む」を、今は「ん」と云ひも書きもするは、「む」の訛り來れるにて、やがて、音便の一なり。また、此の「む」は、音便にて「う」とも云ふ。例へば「行かむ」「讀まむ」を「行かう」「讀まう」などいふ如し。

此の「む」は、極めて轉じ易き詞にて、古へには、此の「む」を轉じて「も」とも云ひたる事あり。萬葉集に

かみつけの佐野田のなへのむらなへに
　　ことはさだめつ今はいかにせも

これは、いかにせむの意なり。これを

むかひゐて見れどもあかぬわぎもこに
　　立ち別れゆかむたつき知らずも

などいふ時の「も」と仝視すべからず。この「知らずも」の「も」は、嘆息の意をあらはす「も」にて」未來の意のにあらず。

また「む」は、古へには「な」とも通ひ云へる事あり。万葉集の歌に、

梅の花咲きたる園の青柳を
　　かづらにしつゝ遊びくらさな

此の「遊びくらさな」は「遊びくらさむ」の意にて、此のなは、「なむ」の「む」の略かれたるものならむとればゆ・かゝる「な」を、感嘆の意をあらはす「な」と混

同すべからず。古今集に

蟬の聲きけばかなしな夏衣
　うすくや人の成らむと思へば

とある「かなしな」の「な」の如きは、「かな」といふ意にて、感嘆の「な」なり。これと同視すべからず。

また、未來の「む」は、延べて「まく」と云ふ事あり。例へば、

大海の荒磯の洲鳥朝な〳〵
　見まくはしきを見えぬ君かも　（萬葉集）

大和路の島の浦わに寄る浪の
　あひだもなけむ我が戀ひまくは　（仝　上）

天ぎらし雪も降らぬかいちじろく
　此のいつしばに降らまくを見む　（仝　上）

紅葉の過ぎまく惜み思ふどち
　遊ぶこよひはあけずもあらぬか　（仝　上）

時雨のあめ間なくな降りそ紅に
　にほへる山の散らまくをしも　（仝　上）

老いぬれどさらぬ別れのありと云へば
　いよ〳〵見まくはしき君かな　（古今集）

山城のいはたの岡の岩つゝじ
　いはまくはしき花の色かな　（夫木集）

見ても又亦も見まくのはしければ

馴るゝを人は厭ふべらなり

（古今集）

以上の例の「まく」は、皆「む」といふ詞を延べたるにて、「見まくはしき」は「見むことはしき」の意。「わが戀ひまくは」は「わが戀ひむは」の意。「降らまくを見む」は「降らむを見む」の意。「紅葉の過ぎまく惜み」は「紅葉の過ぎむを惜み」の意。その他、推して知るべし。

また、此の「まく」の「く」を略きて、「ま」とのみ云ふことも、常にあり。例へば「見まほし」「行かまほし」「聞かまほし」等なり。

諸共にをりし春のみ戀しくて
獨り見ま憂き花ざかりかな

（拾遺集）

「獨り見むことの憂き花ざかりかな」といふ意にて、此の「見ま憂き」の「ま」は、「む」と同じなり。

副詞

副詞といふは、動詞、形容詞、或は他の副詞の上に副へて、其の動作形容の有樣を、なほ種々に形容する如き詞なり。例へば「只管學ぶ」「頗る寒し」「甚苦し」「いと靜に住む」「笛の音遠く聞ゆ」「昔、男ありけり」「總て善し」などいふ時の「只管、頗る、甚だ、いと、靜に、遠く、昔、總て」などいふ如きものにて、皆、これ等の詞は、以上の例にて、其の動作形容の有樣の如何にあるかを云へるなるを知るべし、例へば、「只管學ぶ」と云ふ時は、「只管」は「學ぶ」動作の有樣を「只管」なりと云へるにて、「頗る寒し」と云ふ時は、「頗る」は、「寒し」といふ形氣の有樣を「頗る」なりと云へるなり。以下、これにて推して知るべし。

副詞は、甚數多き詞にして、その數多かる副詞の中には、元より副詞なるものと、また、名詞、形容詞、動詞などより成れるものとの二種あり。此處にあげたる例なる中にても、「遠くきこゆ」の「遠く」は、形容詞より、「昔男ありけり」の「昔」は、名詞より、「總て善し」の「總て」は、動詞より成れる如し。

新古今和歌集講義（八）

鹽井正男

題しらず　　讀人不知

今更に雪ふらめやもかげろふの
もゆる春日と成りにしものを

○今更に、「今となりて」といふやうなる意なり。

○雪ふらめやも、「雪ふらめ」の「め」は、未來の意をあらはす助動詞なる「む」の轉じたるものにて、それと仝意なり。「む」は、ども、や、かなど云ふ助辭に續く時は、斯の如く、「め」に轉じ續くが、此の「む」のきまりなり。やもは疑問の意をあらはす「や」に、感嘆の意をあらはす詞なる「も」を添へたるにて、「やは」と云ふと仝じく、所謂「反語」と稱するものにて、されど、「雪ふらめやも」と云へど、「雪ふらんや、雪は降らじ」と確め云へる詞也。

○かげろふの、「かぎろひ」或は「かげろひ」とも云ひ、長閑なる春の日に、うら〳〵と煙りの如く立ちのぼりて見ゆる氣を云ふなり。

○一首の意は、今は、最早、陽焔も、うら〳〵ともえ立ちて見ゆる春の日と成りたるものを、など、今と成りて雪の降るべき、雪は決して降らじ、最早降りはせじと思へど、ハテ、サテ、雪はなほ降るワイとながめうたへるにて、雪は冬の物なれど、

陽焔もゆる春の長閑き日になりたれど、最早雪は降らじと思ふに、不思議にも、雪は降るよと、稚げに疑ひ云へるにて、春の雪をよみたる歌なり。

題しらず　　　凡河内躬恒

いづれをか花とはわかむ故郷の
　春日の原にまだ消えぬ雪

○春日の原、大和の春日の里の野べを云へるなり。此の里には、梅の花の多かりしものとればしく、萬葉集などにも、

霜雪もいまだ過ぎねど思はぬに
　春日のさとにうめの花見つ

霞立つ春日の里の梅の花
　あらしの風に散りこすなゆめ

霞立ち春日の里の梅の花
　花にとはむとわがもはなくに

など、此の里の梅をうたへる詞あるにて知るべし。されど、春日の里と云ひたるのみにて、梅の花あることを思はせたるなり。

○一首の意、春日の里の雪間に咲き出でたる梅の花は、花と見ゆるが反て雪にて、まだ消え殘りたる雪と見ゆる方が花ならむか。何方を誠の花と見別けんものにやと、殘れる雪間にまじりてにほひ初めたる梅の花、相似たるけしきより、何れを花と見別けんものにやと、をさなげにまどひよめるなり。

家の百首歌合に餘寒の心を　攝政太政大臣

空はなほ霞みもやらず風さえて
　雪げにくもる春の夜の月

○風さえて、寒さの身にしみとほるばかりなるをさゆといふにて、されど、風の身にしむばかり寒

きを云ふなり○雪げにくもる、「雪げの雪に曇る」と云ふべきを、其の「雲」を略きて云はぬなり。されど、「雪を催す雲に曇る」といふ意なり。

此の「雪げ」といふ詞は、彼の「雪げの道」などといふ時の「雪げ」の意にはあらぬなり。「雪げの道」の時の「雪げ」は「雪消ゐ」の意なり。混ずべからず。

○一首の意、春には成りたれど、空は未だ霞みもせずして、吹く風は身にしみわたりていと寒く、雪を催す雲の爲めに、ぼんやりと朧に曇りたる春の夜の月よといふ意にて、うらさむき餘寒の空、讀むより身にしみてればゐてあはれなる歌のけしきなり。「雪げに曇る」と云ふ事を、無理なる詞づかひとて、難ずる人あれど、下に「曇る」と云ふ故に、上に「雲」と云はず略きたるにて、それなか〳〵に、此の時代の詞づかひの巧みなる所なり。

女子の　三從　四行　五病　（貝原益軒）

父の家に在ては父に從ひ　夫の家に在ては夫に從ひ
夫死しては子に從ふ
之を三從といひ

婦徳　婦言　婦容　婦功
之を四行といひ

婦人の心ざと和順ならざると　怒り怨むと
人を謗ると　物を妬むと
不知なると
之を五病といふ

此の五病の中にて、殊更に不知を重しとす、不知なるが故に、五病起ればなり。



雨月物語

佛法僧

上田秋成

うらやすの國ひさしく、民作業をたのしむあまりに、春は花の下に息らひ、秋は錦の林を尋ね、しらぬ火の筑紫路もさらではと械まくらする人の、富士筑波の嶺々を心にしむるぞそゞろなるかな。伊勢の相可といふ郷に、拜志氏の人、世をはやく嗣に讓り、忌こともなく頭おろして、名を夢然とあらため、從來身に病さへなくて、遠近の旅寢を老のたのしみとする。季子作之治なるものが生長の頑なるをうれひて、京の人見するとて、一月あまり二條の別業に逗まりて、三月の末吉野の奥の花を見て、知れる寺院に七日ばかりかたらひ、此のついでに、いまだ高野山を見ず、いざとて、夏のはじめ青葉の茂みをわけつゝ、天の川といふより踰ゑて。摩尼の御山にいたる。道のゆくての嶮しきになづみて、おもはずも日かたふきぬ。壇場、諸堂靈廟、殘りなく拜みめぐりて、こゝに宿からんといへど、ふつに答ふるものなし。そこを行人に所の掟をきけば、寺院僧坊に便なき人は、麓にくだりて明すべし、此の山すべて旅人に一夜をかす事なしとかたる。いかゞはせん、さす

がにも老の身の險しき山路を來しがうへに、事のよしを聞て大きに心倦つかれぬ。作之治がいふ。日もくれ、足も痛みて、いかゞしてあまたのみちをくだらん、弱き身は草に臥とも厭ひなし、只病給はん事の悲しさよ。夢然云、旅はかゝるをこそ哀れともいふなれ、今夜脚をやぶり、倦つかれて山をくだるともれのが古郷にもあらず、翌のみち又はかりがたし此の山は扶桑第一の靈場、大師の廣徳かたるに盡きす、殊にも來りて通夜し奉り、後世の事たのみ聞ゆべきに、幸の時なれぞ、靈廟に夜もすから法施したてまつるべしとて、杉の下道のをぐらきを行く、靈廟の前なる燈籠堂の簀子に上りて、雨具うち敷座をまうけて、閑に念佛しつゝも、夜の更けゆくをわびてぞある。方五十町に開きて、あやしげなる林も見ねず、小石たも掃ひし福田なから、さすがにこゝは寺院遠く、陀羅尼鈴錫の音も聞えず。木立は雲をしのぎて茂さび、道に界ふ水の音はそ〳〵と清わたりて物がなしき。寢られぬまゝに夢然かたりていふ。そも〳〵大師の神化、土石草木も靈を啓きて、八百とせあまりの今にいたりて、いよゝあらたに、いよゝたふとし、遺芳歴踪多きが中に、此の山なん第一の道場なり。大師いまぞかりけるむかし、遠く唐土にわたり給ひ、あの國にて感させ給ふ事れはして、此の三鈷のとゞまる所我が道を揚ぐる靈地なりとて杳冥にむかひ抛させ給ふが、はた此の山にとゞまりぬる。檀場の御前なる三鈷の松こそ此の物の落とゞまりし地なりと聞、すべて此の山の草木泉石靈ならさるはあらずとなん。こよひ不思議にもこゝに一夜をかりたてまつる事、一世ならぬ善縁なり、爾弱きとて努〳〵信心をこたるべからずと、小やかにか

たるも清て心ぼそし。御廟のうしろの林にと覺えて佛法〳〵となく鳥の音山彦にこたへてちかく聞ゆ。夢然目さむる心ちして、あなめづらし、あの啼鳥こそ佛法僧といふならめ。かねて此の山に栖みつるとは聞しかど、まさに其の音を聞しといふ人もなきに、こよひのやどりまことに滅罪生善の祥なるや。かの鳥は清淨の地をえらみてすめるよしなり。上野の國迦葉山、下野の國二荒山、山城の醍醐の峯、河内の杵長山、就中此の山にすむ事、大師の詩偈ありて世の人よく知れり。

寒林獨坐草堂曉　三寶之聲聞二一鳥一
一鳥有レ聲人有レ心　性心雲水倶了々

又ふるき歌に

松の尾の峯靜なる曙に
あふぎて聞けば佛法僧啼く

むかし最福寺の延朗法師は世にならびなき法華者なりしほどに、松の尾の御神此の鳥をして常に延朗につかへしめ給ふよしをいひ傳ふれど、かの神垣にも巣よしは聞えぬ。こよひの奇妙既に一鳥聲あり、我こゝにありて心なからんやとて、平生のたのしみとする俳諧風の十七言を、しどしうちかたふいていひ出でける

鳥の音も秘密の山の茂みかな。

女五常訓

三木五百枝寄贈

こは上杉鷹山公、文化十一年、其の孫長姫の方へ遣さんとて物し玉へるなり。當時の女子教育、百人一首、伊勢、源氏の類をのみ教へ、倫理を明に知たるものなかりしをもて、特に意を用ひてものせられたるにこそ。

それ人としては、五常の道を以て、身を修むる基とするなれど、常にしも此の五の物を怠り給ふべからず。先一ッには仁也、二ッには義也、三ッには禮なり、四ッ五ッには智なり信なり。これを五ッの常とはいふなり。常とは、尊きも賤きも、老たるも若きにもかぎらず、男女の隔てもなく、日々夜々になす事いふこと、皆善惡の二ッを分ち、よきを行ふ事を常とは申すなり。中にも、男子は七歳より小學に入りて、身を修むる道を習はしむ。女子は物習ふはじめとはいへども、只和風の習として、百人一首、伊勢物語、あるひは源氏、或は土佐日記やうの物まち〳〵有りといへども、風雅のみにして、五常を明らめん便には遠かるべし。女とて五ッの内、一ッを闕げて安からんや。扨こそ大概を爰に志るし、便りとなし侍るものならし。

仁といふ字をあはれむとよめり。たとへば、木の實に核生れついて有るものなり。仁心は人ごとに有りて栽うられど生出るが如し。又仁の字をひとゝも讀ませたり、そのゆゑは、仁は人也といひて、仁なくんば人とはいふべからず、仁は團扇の如く、あはれは風の如し、あふひて風を出さゝれど團扇の徳なくあはれみを施さゝれど、仁心もなきに似たらん、猶しも團扇に風のなきがごとし。第一父母の恩を思ひて親しく愛し。次に嫁しては、舅姑をひさうし。夫によく事へ。姉を敬ひ、妹をあはれみ。下女はしたに情をかけ、出入りのともがらに愛敬をなし。子をそだつるにも、實とまゝしきのへだてをなさず、養育を心にかけ、鳥けだもの虫類にいたる迄、物の命をとることをつゝしむべし。

淳和天皇の御后正子と申せしは、至て仁心ふかくましく、捨子を拾ひ玉ひ、乳ある者を數多かゝへ置き、これに養はせて人となし給ふ、かたじけなき仁心のためならずや。

一義はよろしきと讀み、たとへを、絹布のたぐひをつもり、是は身是は袖と、よき程に截ち分るが如し。善惡を二ッに分ち、時のよろしきに隨ひ、不義なる事をいましむ。密通はいふに及ばず、假りにも夫の目を忍び、我まゝなる働き有るべからず取るべき物は速に取り納め、遣すべき物は快くつかはし。人の怡を聞きてはともに怡び、人の憂を見てはみづからも悲しむ。夫の留守に姿を飾らず。親夫より先に寢ず。不時の食を食せず。仁の心を施すとも、義を以て行ふときは、先づ親への孝を先とし、次に他人を愛しつべし。他を先にするは逆なれば義にかなはず、先づ近きを調へ、次に遠きをよろしくするを、誠のよろしきとはいふ。まためなる人にも、辭義正しきに過ぐるは却て義に非ず、その程々の辨へて、或は往くべきかたと、ゆくまじき處を考へ、惡きを異見し善を譽めて、善惡の二を知るを義といふ。龐居士が娘靈照女といひしは、籠を作りていとなみとす、或日路のほとりに靑銅落ちて有りしを拾ひ、價に籠を捨てゝ歸りけり。我が家にいたり父にまみゑていふやう、今日かごの賣れざる折から、幸に主なき靑銅を拾ひ價に籠を捨て置きて歸りしと語る。父龐居士之を聞て、主なき錢ならば買人もなし、買人なきを推して賣るは義にあらずと云ふ、照女げにもとおもひ又本の處にゆき、錢を捨てゝ籠を拾ひ歸りけり。此の親子平生かくの如くなれども、其の一を

事て義の手本となすのみ。

一體はつゝしむと讀む文字なり。神佛に敬みをなし、主人を尊み、師匠をあがめ、親類をひさうし、みだりに立振舞ことなく、同輩下々にも其の程々を辨へ相應の行義を勤むべし。ふみをかくにも、殿づけ様づけの位を知るべし。作法は禮義三百、威儀三千條有となり。是を諸禮と云ふ。然れども一々知るに及ばず、過と不足とのなき様を専一とす。よき衣服を數多持ちたればとて、そはめなる人よりすぎたる物を着ず、うちかけ、かづき、帽子、置わた、或はさげがみ、かうがいわげ等みな禮なり。多く世上の行ひをみるに、伊達と榮耀の爲にかざれる人あり。禮を知らざる人のなすわざなり。立つも居るも臥すも歩むも、みな禮に非ずといふ事なし。又親を養ふも子にかしづかるゝも、禮を以てせずんば鳥けだものにひとしかるべし、養ふのみは孝とも禮ともいふべからず、敬を以てこそは禮ありといふべけれ。旦には夫より先に起き出でゝ亂れ髪を見せず。女の僻多き中にも、ながし目、立ちぎゝ或は人のよみ居る文をのぞかず。或はうつはものは中に一物もなくとも、みちて一ぱい有が如くもて扱ふべし。又は人なき一間どころへ入るにも人のおはします如くにおとなひ愼みて入るべし。是を誠のつゝしみといふ。人をうやまふにつひえやうけいはくの爲にするは、禮の本を失ふなり、これらを禮の大むねと知りて、心に片時も忘るべからず。

一智は知るなり。萬の事を辨へ知るをいふ。愚なるものは、道を行はんとすれども中らずして、仁義禮ともにはづるなり。人生れてその儘、母の胸を

まかして乳を呑んとするは、自然と生れつきたる良知なり。生長の後學問し、善惡の道理を辨へるも、此の良知の有るが故なり。然れども大智、小智、愚智、賢智の違ひあり。已が利欲に掩はれ自ら替りあり、道を守れば賢智に登り、名利に耽れば小智また邪智にすゝみ、天理を知らずしては神前に幸を祈り却て神慮をけがす、いかでか納受あらんや。縫針は人に劣りたりとも、夫の家を修むる道を知りたるを大智と云ふ。又裁縫或は機物、小料理なんど才覺ありて、父はしりがき、當用手わざ暗からぬを小智と云ふ。是等の知恵を以て、五常の道を明らめ知ることも易からんや。生れつきたる知は鑄立てたる鏡の如し。みがゝざれば、物の影もすゞしく見え難し、古き文を見て其の心のかゞみを磨き、心ばせを勤むるときは、知徳を照して人と對面するにも、言葉のはしを聞きて心に善惡をさとり、又心はまがりながら言葉に花を咲かせ、うつくしくいひならべまよはすともがら有りとも、智の至る處よりして見れば、智者はまどはずして是を信ずることなければ、あしき道にも引き入れられず、人の嫌へる事と知りては則ちなさず。愚かなるものは、夏のむしの燈火をとらへんとして、身を失ふにたとへたり。然らば智を以て身の過を除く事かくのごとし。

一　信はまことゝ讀せたり。人べんにことをと書きて、まこととよむ。人の言葉は誠なるものなり、もしひとことも僞るときは、人といふべからず、まことある人を人といふが故なり。僞も誠も言葉より出づ、愼むべきは言葉なり。假にも嘘をいふべからず。約束を變ずることなかれ。辯舌を以て人を

欺き、知らざる事を知り顔し、なきものを有りがはするたぐひ、みな信なき輩のなすわざなり。仁義禮智の四は、春夏秋冬なり。信は土用のごとし。四季折々年々違ひなきは天の寔なり。五常又かくのごとし、誠なくんば五常の内一ッも堅固に有るべからず、子を育つるにも假初にも僞りを以て愛し、或はそらごとにれどしなやましむる事を誡むべし、稚き程は心まさしきものにて、何事をもまことにれもひとり、僞りもよきことにれもひて、成長の後も妄語を習ふなり。むかし孟子といへる人をさなきとき母にむかひて曰く、東家猪を殺す何の爲ぞと問ふ。孟母宣く、其方に與へん爲と僞り給ふ。暫くして孟母おもふやう、子に與へんといひしは、我が子に僞りを敎ふるものなりと、やがてかのゐのこを調へて、孟子に與へ給ふ。有がたき母の御志にてぞ有りける。氏よりそだちといへるは、かく有る事をやいはん。故に子をそだつるにも、専ら五常の道を守り給ふべし。

荒木田麗子が豊臣の辞

栗田寛氏寄贈

足利とて、清和の源より出づるながれをくみたる人なん。そのかみ元弘のころはひより、代々うちつゞきて、天が下弓箭のみちを怠らずありつれど、その始よりわやしう國々みだれたちて、麻のごとくなりしかど、いかめしきいきほひも、日にそへてれとろへつゝ、終に十繼わまり五つぞかりにわたりては、みやこのうちにさへわりわびつゝ、直人のやうに境をいでさすらへぬ。また織田とてこたびは 桓武の末葉、平姓にて、先のにもれとらぬ人がらにて、矢た

け心はことよなう增りたれど、縱橫のはかりごとなりて、鹿を逐の志もせちなれど、かくてぞ世は治りぬらんと、みな人うしろやすくおもひあへるに、宿世のほどいと口をし、おもいかけず漁陽の鼙鼓地をうごかして來り俄の風大きなる波のまぎれにあへなくほろびぬ。いとゞ世はみだれまさりて、みやこもひなもすべて軍の園となりつゝ、貴きもいやしきも、みな弓矢の道をのみもとめて、孔孟のかしこきをしへさへ、用ゐる事なき世となりしより、九重の城闕も、煙塵にかすめられ、四方の關門も黃雲にとぢられぬるありさま、さらにいひやらんかたなし、西東の國々には、七雄ならび起りて、圍碁のあらそいをなせり。いかなる人かかばかりの世を治めん、とおぼゆるに、豐臣とてはかく〳〵しき人數にもあらぬが、すぐれて心おきてひろく、よく國民を理る計略もいみじけれど、いつとなくもろ人の從ひゆるして程なくいきほひもことの外になりつゝ、みやこちかきわたりはさらにもいはず、遠く師を出して、邊彊を志づめ、はるかに旗手をすゝめて、胡虜をたひらげ、策を杖て天子に謁し、軾に憑て東藩を下せしより、六王畢てみやこの内に阿房宮ばかりの殿づくり、いかめしうし住つゝ、上なき位をきはめて、萬の事心にまかせたり。さしも猛かりし心にも、又物の憐を志りて、花をめでゝよしの山叢の霞をわけまよひ月をおもひてはくもゐの庭の秋の露にぞぼちて、高きましはりをなん志つるより、紅葉のをりをもまたぬ、若葉の比しも行幸をもよほし、きこゑたるは、いといみじ、又閑なるをり〳〵は、心をやりてあそびなどをもしつゝ、今刑鞭蒲朽て螢むなしく去り諫鼓苔深しく鳥驚かぬ代と（恐衍）なりとて、民の心をも

なぐさむべく、舞の袖をさへかへしたるは、鴻門の古へにやうかはりて千年の後のためしにもなりぬべくなん。かくてしもありぬべき世を、さすがに武士心のをゝしくて、見ぬもろこしをさへ志たがへんことをおもひて、大なる船どもつくり出つゝ、數多のいくさをもよふしつるにぞ、西の國のつはものは、のこりなく出立ぬ、みづからもみやこを出て、筑紫のかたに假なる志つらいして、行かよひつゝ、かしこの便ればつかながらず、聞わたるに、纓を請にはあらねど、南越をつなぐむかりのいさをしも就つれど、猶あかずとて、いとみかはせるたゝかひの庭には、花飛蝶驚けども人は春のくるゝを志らず、節志蜂愁れども、たれか秋のわかれを惜むともなきに、風雲人前に向て暮易く、歳月老底よりかへりかたきならひとにや、いまだ凱歌をもとなへざるに、伏見のわたりは、草むの露ひかりをかくせしかむ、天下はてる日のくれしおもひして、物おぼゆる人もなし、國のうちのみにもあらず、唐土なる人にもおなじ心におもひませひつゝ、今はとてひきゐて歸りぬ。まことにたくひなきはまれなつる人なりとて、つひは神にあかめて仰ぎまつりつるは、又なき身のゝちの榮ねろかし。さはいへと桑田碧海はやくあらたまり行に、なびきし秋の露消てとはまづいはれぬべく蜀相の祠堂いつれの所よりたつねんとうちわびて長く英雄の涙中に見つる有ぬべくなん、

入果しくもまの月はあつさ弓
ひきかはる世を道に志れとや

○上文の標注に云、足利とて淸和天皇より七代の後八幡太郎義家の孫義國の二男義康、下野國足利に住す、仍て稱號となせり、源より出るといふ詞

をうけて、流をくみたるといへり、義康より八代の後權大納言尊氏をさしていへり、○尊氏元弘二年四月上落通志於天皇五月攻六波羅之八月與時行屢戰破入鎌倉、自稱征夷將軍○麻のごとく、李白詩三川北虜亂如麻、○終に十繼あまり、十五代目義昭の織田信長と不和になりたまひて、安藝の足利家をたのみたまひて下られける、つひに世に出で給はすして一生を終たまへり、○織田は、桓武天皇より十二代平相國清盛の男重盛の孫資盛の男親眞、始て織田と稱せり、○縱横のはかりごと、唐詩選、魏徵か詩、中原還逐鹿、投筆事戎軒、縱横計不就、慷慨志猶存、此の詞にてかけり、○漁陽の鼙鼓、唐の玄宗揚貴妃に舞まはせ樂しみ居たまひし時、安祿山反して漁陽より起り、俄鼓うちさわぎ、都にせめ入しを、明智光秀の丹波より來本能寺に信長の何心なく遊女なとあつめて酒宴せしを、俄にとりかこみしになぞらへたり、○あへなく亡びぬ、信長天正十年六月二日、光秀の爲に四十九歳にて生害せしといへり、○軍の園、增鏡、聖徳太子の墓を軍の園にしてとあり、○孔孟のかしこき教、兵書、亂世孔孟不足用、○西東の國々には、周の末、戰國の七雄は、燕、趙、韓、魏、楚、齊、秦也これになぞらへ、西國には島津大友鉾を爭ひ四國には三好長曾我部、中國には毛利尼子、關東には上杉北條里見佐竹伊達徳川、いづれも武威を逞くせしをいへり、○圍棊のあらそい、杜律、聞道長安似奕棋、○豐臣とて、秀吉公をいへり、公は尾張愛知郡中村郷の産にて、卑き人なれどかく云り、○都近きわたりは、山崎合戰に明智光秀を亡し、志

津嶽にて柴田勝家の軍をやぶり、伊勢に瀧川を攻、美濃岐阜を手に入、紀州をせめ從へしを云り、○遠く師を出し、天正十三年、遣ニ秀長秀次一伐ニ平四國一、同十五年、西征して島津を降せし事也、○上なき位を、從一位關白大政大臣になりたまふを云ふ、○花をめでゝは、文祿二年二月、遊ニ芳野一見レ花五首詠歌あり、○月をおもひては、天正十六年八月十五夜、聚樂亭見レ月和歌會あり、○紅葉の折をもまたぬ、小倉山峯の紅葉ゞ心あらは今一度のみゆきまたなん、○若菜の比しも、天正十六年四月十四日、帝聚樂亭に行幸、○あそびなどをも、こゝにては猿樂なとを云へり、○刑鞭蒲朽云々朗詠集、江相公の詩也、○舞の袖、文祿年中秀吉公暮松新九郎に猿樂をならひ自舞給へるを云、○鴻門の古、鴻門の會漢高祖楚項羽祭の會なり、

○大なる船ども、天正十九年、九鬼義隆に命して伊勢浦にて軍船數百艘を造れり、其の大なるを日本丸といへり、○纓を請は、これも魏徵か詩也、訓解、漢遣ニ終軍一使ニ南粤一、軍請願受ニ長纓一必羈ニ南越王一而致ニ之闕下一、此の事を當て朝鮮軍先手將加藤清正朝鮮の二王子を生捕しに比せり、是又本文の心を用ひたり、○猶あはすとて、朝鮮を切從へ、猶大明を伐從へんの心あるをいふ、○花飛蝶驚、三体詩の陸龜蒙か詩、○節去蜂愁、三体詩の鄭谷か詩、○風雲人前に向て、朗詠、良青道か詩の句也、歲月老底も同對句也、○伏見のわたりは、慶長三年八月十八日、秀吉公六十三歲にて伏見にて薨したまへるを云、○てる日のくれし、古今、文屋康秀の、草深き霞の谷にかげかくし、てる日のくれし今日にやはあらぬ、てふ人もあれど

その大要をいひたるなり、年中行事歌合、大唐商客、我か國のみづきそなへてとしごとに、いまもくたらのふねそたえせぬ、○終には神にわがめし、慶長四年四月十八日、勅賜二秀吉社諡豊臣大明神一、○桑田碧海、唐盧照鄰の詩の句也、○なひきし秋の霜消て、東鑑に云、今日當二幕下將軍御忌日一、參二彼法花堂一、念誦讀經の間、相二催懐舊之涙一、注二一首歌於堂柱一、長明草も木もなびきし秋の霜消てむなしき苔をはらふ山風、○蜀相の祠堂は、杜律の詩句なり。

おきの玉藻（續）　永石德文

藤樹先生年譜（二）

七年、辛酉、先生十四歳、在二大洲一。

或時、家老大橋氏、諸士四五人、相伴ひて吉長公の家に來り、終夜對話す。先生以爲らく、家老大身なる人の物語り、常人に異るべしと、因て壁を隔て、かくれ居て、終夜之を聞くに、何の取用ゆべきことなし。先生遂に心に疑て、これを怪む。嘗て、寺に入りて、手跡を學び、其の暇に詩聯句を學ぶ。まゝ佳作あり。

秋八月七日、祖母卒。歳六十三。

八年、壬戌、先生十五歳、在二大洲一。

秋九月廿二日、祖父吉長公卒す。歳七十五。

先生平居、僚友相應接の間、一の過失あれば、他を耻、自悔、月を越るも忘るゝこと能はす。其の羞惡深如此。故に嘗て一物の遺受も甚謹めり。

寛永元年、甲子、先生十七歳。

夏醫師の招によつて、京都より禪師來て論語を講

す。此の時大洲の風俗、武を專にし、文學を以て弱なりとす。故に士人是を問くものなし。唯先生一人、往てこれを問く。蓋先生幼にして祖父母に離れ、家を繼、君に仕ふ。是故に身を脩め家を齊んと欲すれども、其の道を知らず。嘗て大學の句讀を習ふに、正心脩身齊家等の語あるによつて、儒學に身を脩め、家を齊る道ある事を知る。然れども、敎ものなくして、默止す。今禪師來て、講ずるを幸として、潜に往て是を問く。論語の上篇を講じ終て、禪師京に歸る。先生又師とすべき者なきを愁て、四書大全を求む。然れども、人の誹謗を憚て、晝は終日諸士と應接し、毎夜深更に及て、業として二十枚を讀終て寢ぬ。其通せさる所あれども、思て忘れず、夢寢の間人ありて示すがごとくにして、曉得する事多し。先大學大全を讀む事はとんど、百遍に及て、始て曉得す。大學通じて後、語孟を讀むに、皆通す。

二年乙丑、先生十八歲、在㆓大洲㆒。

春正月四日、本生の父吉次公死す。享年五十二。

四年丁卯、先生二十歲。

先生專、朱學を崇て、格套を以て、受用す。是年始て、中川貞良の輩、學に志し、同志二三輩會合して、大學を講明す。乃聖學を以て、己が任とす。夏儒法を以て祖父を祭る。

五年戊辰、先生廿一歲。

是年初學同志のために、大學敬蒙を著す。其書物より、四書大全に從ふ。後是を見て、いまだ不精として破㆑之。

六年己巳、先生廿二歲。

春兒玉氏に行く、荒木氏座に在り、先生の到るを

見て曰く、孔子殿きたり給ふといふ。其意ひそかに先生の學を爲ことをそしる。先生曰、汝酒にくらひ酔ふ。對曰、これ何の言ぞや。先生曰、孔子は已に二千年前に卒し給ふ。今我を以て、孔子とすは、文學あるを以てか。文を學ぶは、士の道なり。汝が如きの文盲なるは、是奴僕なり。荒木氏適て曰、我これを戯る。請ふこれをゆるせと云。いまだ圭角ある事如此。后來德日に進にまたがひ、全融和し了、是年いとまを請て、母を江西に歸省す。

九年壬申、先生二十五歳。

春暇を乞て、母を江州に歸省す。其意母を倡て豫陽に歸り、定省の孝を盡さん事を欲す。然れども、母老て故郷を離れ、遠途に趣くを欲せざるを以て、ひとり豫州にかへる。歸路船中にて、始て哮喘を患ふ。きはめて、甚し。

今年改て、織部正に仕ふ。織部正は、大守出羽守の弟也。出羽守諸士を織部正に分ち、與ふ。先生も亦分與の中に屬す。

十年癸酉、先生二十六歳。

春正月朔日、且老母を思ふの詩あり。蓋豫州に來らざるに因て、其定省を得ざる事を歎く。適感あるに依て作す。詩は草稿に見ゑたり。

十有一年、甲戌、先生二十七歳。

冬十月仕を致して、江州に歸る。これより前、毎に家老佃氏に謂て曰、母老て古郷にあり此地に倡ひ來らんと欲すれども、肯はず。願はくは、能く君に奏して、仕を致すことをゆるされんことを、佃氏曰、我必ず能君にまうさん。然れども年を經れども、果さず。蓋其意先生の多才なるを惜

み、且又他に仕て厚祿を得んと欲するの志ならんやと疑ふ故なり。こゝに於て、先生跡を作て、佃氏に捧け、天に誓ふの詞を以て、他に仕ふるの志なき事を顯す。其文にいはく。

今度私、御暇之儀、言上被成被下候得と、奉願候に付而、傳左殿、助右殿、御同心被成、種々御異見之段、忝奉存候、此中も如申上候一に者、何れも如御存知、二三年以前より病氣に罷成候而、次第に人なみの御奉公相つとめ難儀、迷惑に奉存候、一に者、古郷之母、十年以前、ひとり住を仕罷在候、私の外に、別に母をはごくみ可申子も無御座、又はよすかに頼可存ほどの能親類も御座なく候故四五年以前より、漸飢寒に及ぶ躰に御座候間、此地へつれこし可申存たてまつり、去々年御理申上、むかひに來り候處、もはや年罷寄、又は病者に御座候而、里の内をも自由にありき申事不能成躰に御座候、其上女の儀に御座候へど、故郷をはなれ遠國へ参候事、たとひ死仕候而も、成申間敷旨、申候故、不及是非、すて置罷歸候、私儀は、養親共に四人迄御座候へ共、三人には幼少にてはなれ申、今母一人のこり申候、母一人子一人の事に御座候、其上母存生の内も、今八九年の躰に御座候條、御暇申請、故郷へ罷歸り、母存命の間は、如何様のわざ成共仕、養申母相果候はゝ、貴様を頼存めしかへされ被下候はゝ、御奉公仕度、覺悟に御座候、此外、聊存子細無御座候、わたくしの儀に御座候條、左様には、思召間敷候へ共、

若右申上候處、常座のかりごとにて、眞實は、身上をもかせぎ、可申由にて、申上るかと、御推量被成事も、御座候はんと存、此事も度々如申上左樣の所存、少に而も御座候はゞ立所に天道の冥罰を罷蒙、母に二度あひ申間敷候、加樣になげき申所、御聞屆被成候而、不便に思召候はゞ、能樣に御取つくろひ、成被、かりごとに言上仕かなど、きこしめしあやまりの無御座樣に、仰被上、御暇被下候樣に奉レ願外、無二他事一候、恐惶謹言。

三月七日

然れども、猶いまだ許さず。こゝに於て、已ことを得ずして、潜に遁て、江陽に歸る。是年の祿米、悉く倉に積置、朋友に假貸するの米穀あるをも、器物を遺して、これを償ふ、江陽に到る時、銀緡に三百錢あり。祖父の時より使ふ所の若黨一人あり。先生其歸るところなからん事を憫て、銀二百錢を與へて曰、是を持、豫州に歸り、商をなして、世渡せよ。若黨辭して曰、君の銀緡に三百錢。然るを我に過半を賜ふ。我もとより一錢を受る志なし、たゞ君に從而、艱難をなさんと云。先生強て不已。是に於て、涕泣して、銀を受て歸る。

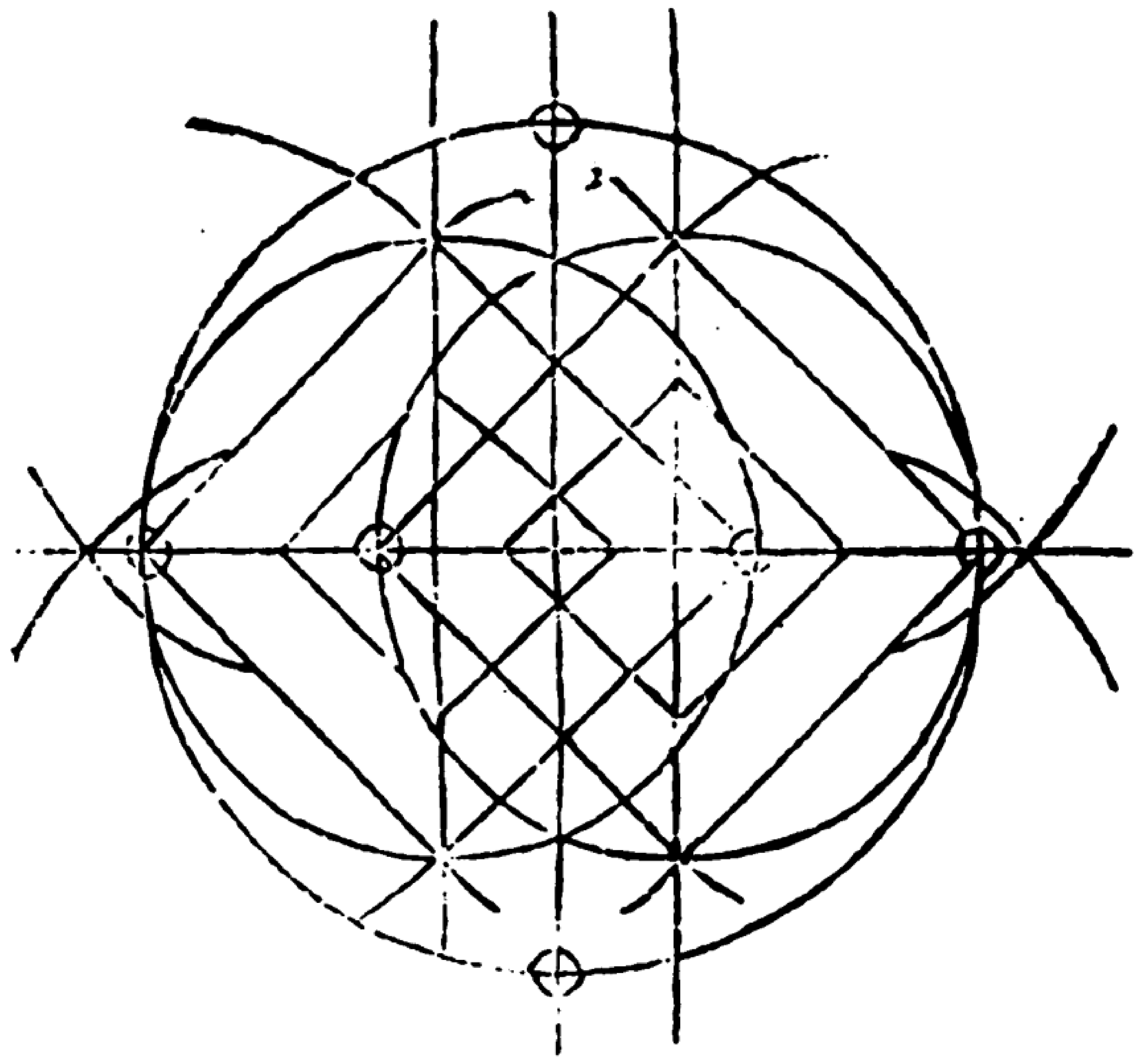
冬十一月、京に在り。先生逃去るを以て、君の惡みありて、江陽にあることを防れんことを慮て、京都故友の家に寓して命を待つこと百日餘。其尤めなきを以て、江陽に歸る。百錢の銀を以て酒を買ひ、又農家に質て、其息に依て、母を養ふ。其後刀を質て、銀十枚を得たり。之を以て米を買ひ、農家に借す。息を取ること、世人より甚減す。是を以てにや。其債を責ずして、來て是を還

納す。（未完）

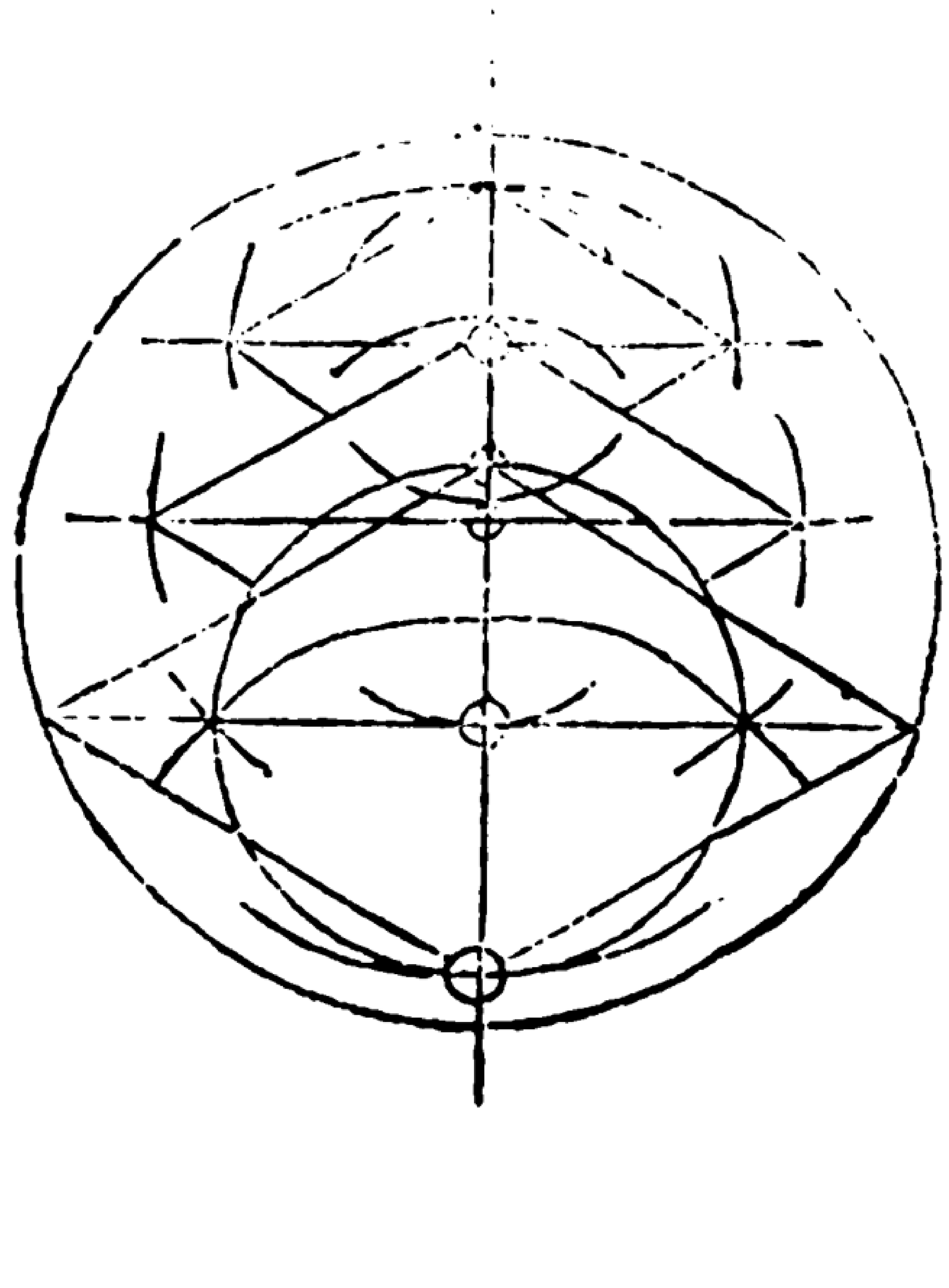
紋帳圖式綱目（つゞき）

井上頼文寄贈

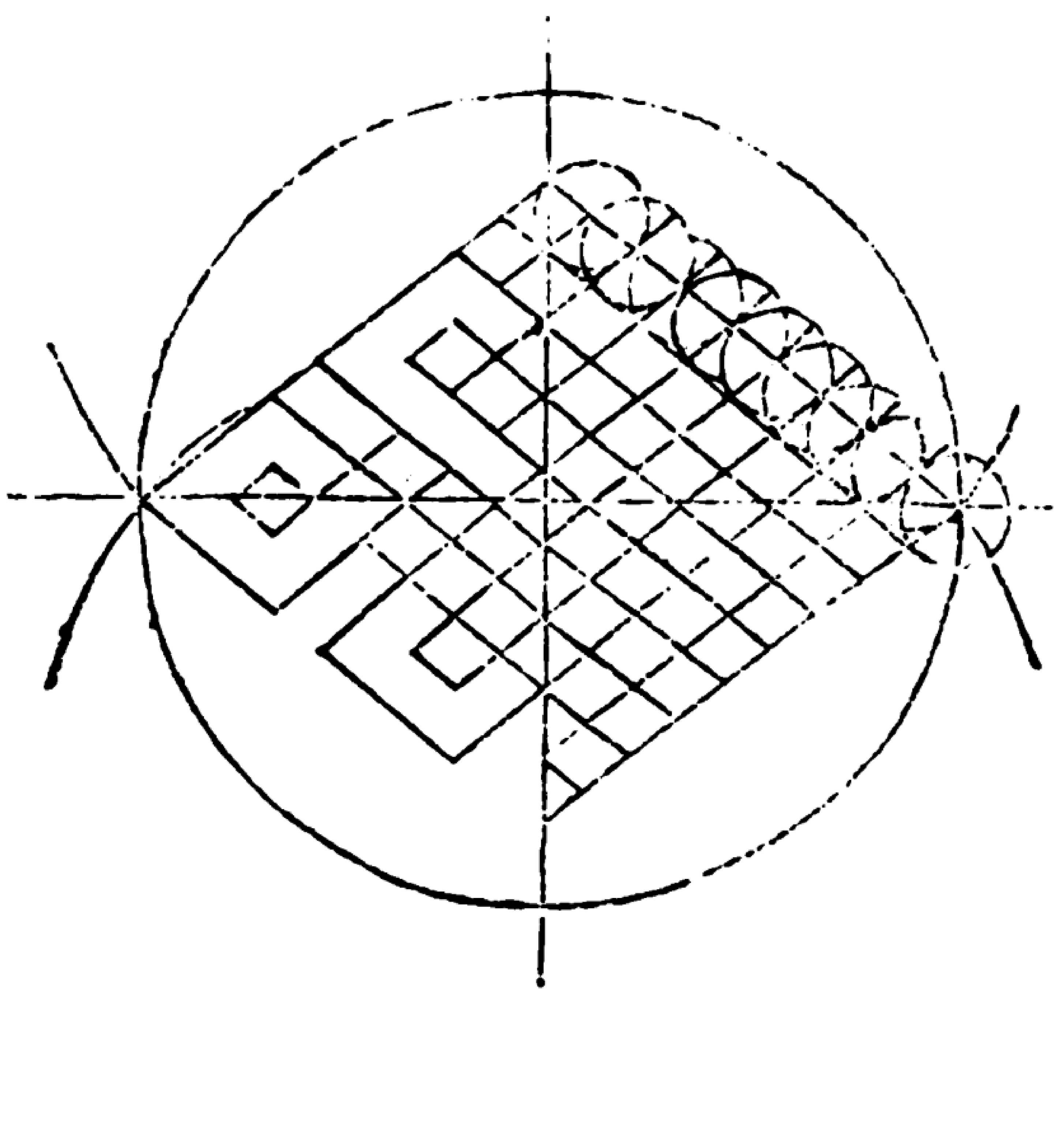
かさねくぎぬきの割



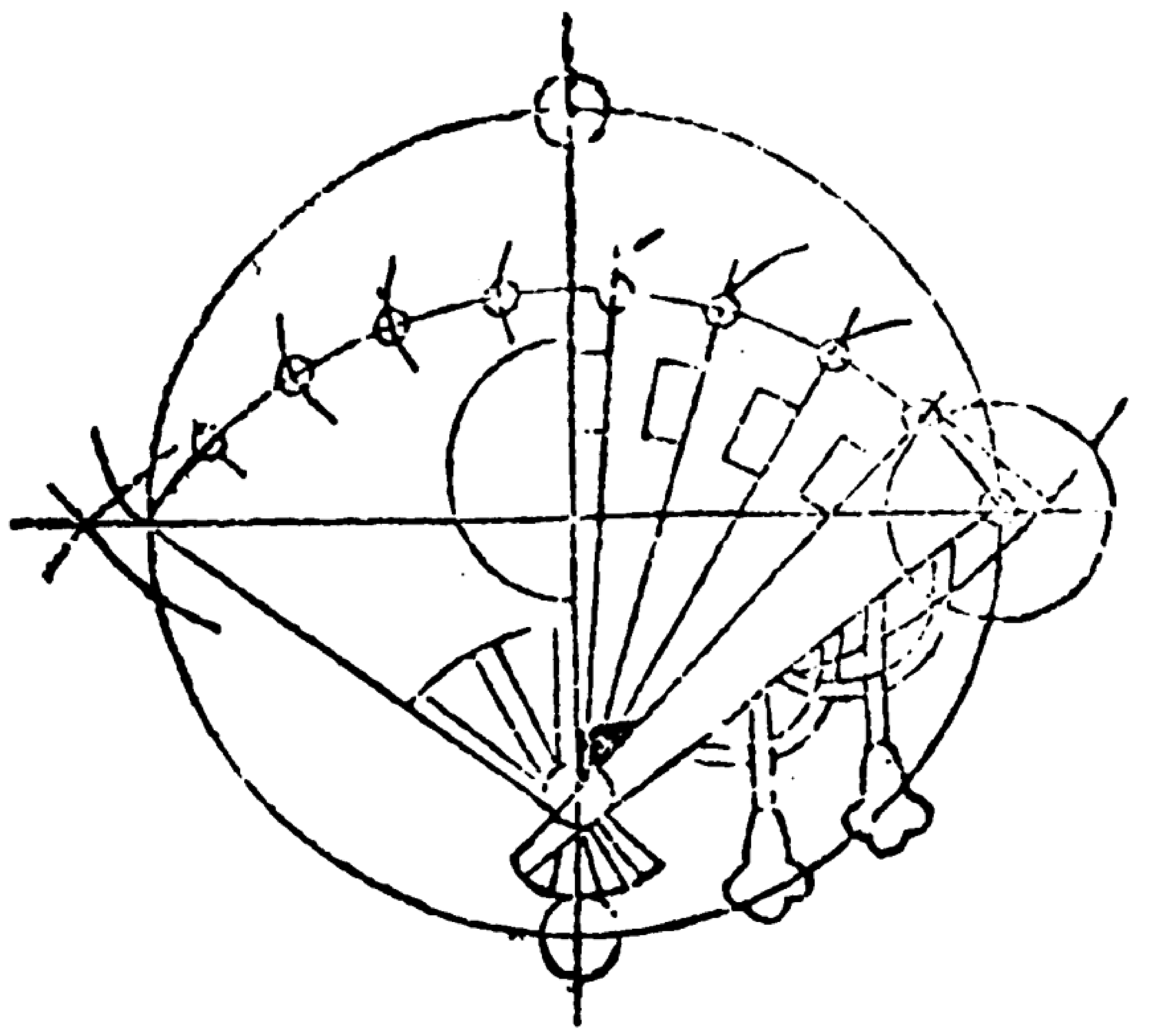
三がいびしの割



たからむすびの割

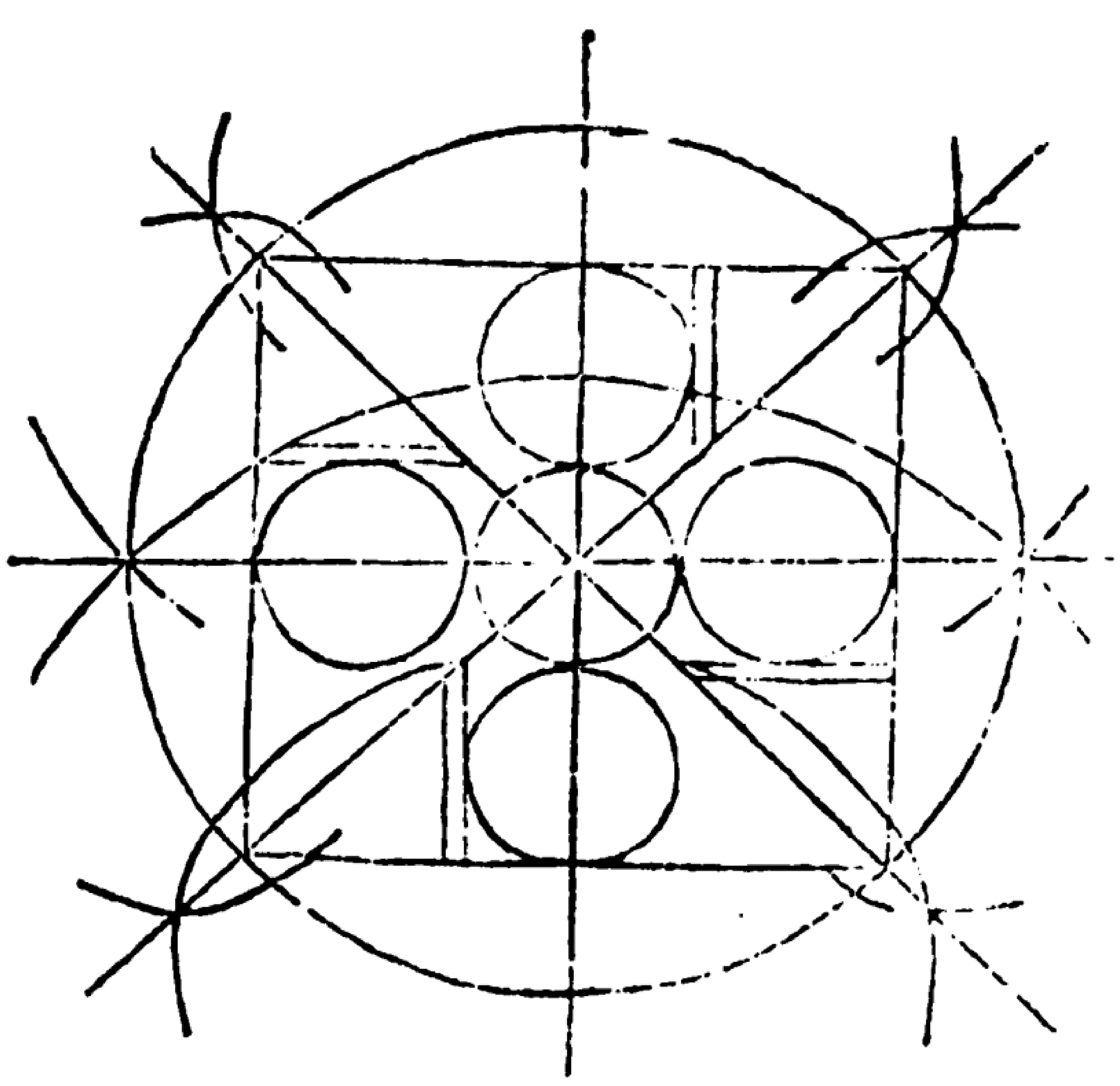


ひあふぎの割



ひらけ扇に日の丸の割

まん字の割



八つ割より出づ

莪しほ草　(二)

風當咲子

小學校　其の二應接所

やう〳〵さきいでしかと見るほどに、はやくも夜半のあらしにちりゆきて、青葉のかげに花の名殘をとゞめつゝ、いまは惜しめどもかひなし。朝な夕なに、おとつれて、袖もあらはおほはんはかり心せしものを、假にさう〳〵しくおぼえて、さなから手の中の玉とられたらんがごとし。例のまどのもとによりゐて、文づくゑにむかへど、きのふ手折し花かめの一枝こそ、いまはなか〳〵にかたみなれ。ひもとく書は例の宇治の物かたりにて、よみもてゆくまゝに、けふは世のはかなさのみおもはれて、かの姫君たちが、八の宮にかくれ給ふところを見ては、おのか父にわかれし折にたぐへられ、中之君か姉君にわかれ給ふを見ては　おのがはらからにおくれし折のことなどおもひいでられ、取かへされぬものから、過きにし方の戀しさのみ打まさり、そゞろに涙さへ催されぬ。今は文みるも物うくて、はたと閉ぢつ。いかにもして、此のおもひはるゝとかり、興ある遊してまかなどおもひめくらすほどに、ふとおもひ當れるは、過ぎし日のそゞろありきの折、かいまみける、かの小學校の有樣なりけり。かねてよりゆかしうおほえて、折もあらは親しくおとつれなましとおもひゐたりしを、けふこそとおもひ立ち。四月廿日のことなりけれど、柳山吹など折まり顔に、おのが色香をきそひ、道のべには、すみれたんぽなどさきみちて、春はなほ殘れるものを、花より外に心ゆかぬも、けにかたくななりや。かくて志ざす門につきしは午前十時ばかりにやありけん。授業時間とおぼしくて、

人なきか如く打しづまり、奥まりたる方より、をり〳〵唱歌の聲もれきこゆ。玄關より左の方に、小使の部屋とおぼしきがあり。こゝにゆきておとなふに、十四五ばかりなる給仕いできぬ。名刺さし出して案内をこへば、しばしまちてよといふ。やがてふたゝびいできたりてこなたへといふ。いふがまゝにしたがへば、廣やかなる廊を渡りて、小さき室に請しぬ。と見れば、入口には黒塗なれるに、白墨もて應接所と書かれたり。内に入れば、こゝには何物もなし。たゞ央にすゑられたる丸きテーブルと、元をかこみておかれたる椅子のとあるのみ。西と北との方は、つやけしなる硝子もてかこひ、南と東との壁のには應擧雪舟などの畫、さては古へのひじりたちの筆のあとなど掛けられ、四方のなげしには、そここゝの景色などうつされたる額、所せきまでかけつらねたり。

さて四十ばかりなる、ゆたかにふとりたるが、にこやかに笑を含みていできたりぬ。これ此の校の校長なりとか。物いひやさしけれども、おのづから尊嚴なる風をそなへたり。ねんごろにもてなしつゝ、教ふるわざのたのしなること、さてはつらきことなど、親しくかたりいづるを、いとをかしときくほどに、次の授業時間とはなりぬ。いづくにてもあれ、御心ゆかん方をみたまへといふに、嬉しくて其處を辭しき。

水産王（續）

石榑青苔

いつも、いつまでも仝じ住居と思へば、殊更に見ねばとて、かたらはねばとて、さびしとも思はざりしに、今は別れねばならぬ身となりては、またしのは

ども物悲しく、はや旅のやうにさへ思ひなりて、伯父御の家にゆきて後の苦勞、父にわかるゝつらさ、それより後の後の後までも思ひやられて、少さき胸もさくるばかりなるに、今までしのばれなれど、いつもの如く兄上にあひたしと思へど、兄上とよばむも何となくをかしく、さりとてほかに呼ぶべき名さへ知らず、滿津男どのといひて見べきか、それとてもをかし、さても今日の父上のお咄のいやにおはするか、面だに見せたまはず、かきみしるほどあひたけれど。

ねゝいかにせむ恥かしや、今となりては今一しほに思ひまされど、いかに親のとく定めたるものなればとて、妹ならぬ少女とはいかで席を同じうせらるべき、さはいへ十幾年膳を一つに、家を同じうしたる身の、いつれ別れて見ぬやうにのみもならず、あゝいかにせむ、見られぬとなれば見たさに堪へず、見じとすれど面かげにたちぬ、又妹も、おゝそれいさ子どのも何をしてぞ、せめていつものやうに書よむ聲なりともきこゆればよきに、琴の音にても。

月日は東京にかよふ度毎にものする滊車のはやきよりも早く、きのふけふと思ふほどに、はやくも一年とくれ二年とすぎて、夏の休暇ごとには必歸來て、父上のうるはしき顏拜むが何より樂といさ子のいふも理、滿津男の物學びせる處はあまり遠しといふにもあらず、冬の休にも歸來て父をなぐさめ、又父上の尋ねたまふ折もあれど、さのみにはおもはねど、こなたはいかに車ははやくとも、老いたる身には疲れのいづることもあらむと、かまへて來たまふこともなければぞかし。されどはるゝとかへり來て、まづうれしやと思ふ時、兄のまづありて、「よくこそ歸

られたれ、」といふをきゝては、上野より仙台までひねもす乗通し、又のりかへて目のくるめく如く疲れたれど、鹽竈の浦にくれど、なつかしき松島ははやわが故郷のやうに思はれて、こゝに宿かる心もいでず、まだ十里にあまれる船路を忘れてついうか／＼と、今いでむ、おくれては詮なからむといふに、又急ぎてのりうつり、小夜ふけて月は波間にきらめき、暑さに船室もむつかしけれど、船館の上にたちて、わが郷の遠目にも見ゆやせむと心あてにうち守りて、心のみははやう父の御許にゐる心地して、夜も今はあけなむとする頃、車いそがせて、門はと／＼と打叩けど、はや其聲に驚きて出給ふを見れど、今までわが身にあらぬかと思ふばかりによわれる身も心も一時に引たちて、つい咄したき心にもなり、眠たかりしもいづちゆきけむ、目はさゆて心きよし、かゝる事見はべりきといへど、かゝることきゝつといひ、遂に旭日のさすをも志らであかすが如きおもしろきこと二たびありて、ことしははや三たびめに近づけど、父もいそ／＼と二人の歸るをまてり。

いさ子は學校中のほまれ者となりて、容色は旭日ににほふ櫻の如く、氣象は雪にほこれる梅の如く、すぐれたる其才、すゝみたる其學、女教師の打よれど、かたらひ草にはいつも出でぬことなし。全校全級にありても、高子はいたく異れるふしありて、これ見よがしに打ふるまひ、髪の多きをほこりかに束ねあげ、うなじの花の簪の大きなるをさし、其香志めたる香水所せくにほはせ、洋風の衣着て、まことに目の縁ならぬをかこち、毛の黄金色ならぬを歎き、女子の教育の完全からぬを憤ろしくおもひ、男子の下に立つことを、終生の恥辱なりと打腹立ちて、學

校にては慷慨家の一人にかずまへられき。これにひきかへていさ子はいつも音なしやかに、きはめて古風の心ばへを忘めしたる髪かざり、衣言葉さへいと優しかりき。されど外目には物學びせる女子らしげにも見えざりげれど、席はいつも最上位を占めたるに、たか子は其名は名のみにて、いつも低き位にぞありける。こときく滿津男はうれしき中にも、われ男と生れて、ともに〳〵なつかしき故郷の山河に辭して、他郷の客となりたる上は、螢をあつめ雪をつぞへて、うき苦をかさぬとも、あはれ名を成し學を修へずてやは、やはか手弱女にたくれてわるべきとふるひ勇みてけれど、こも教師の心にかなひ、いづれも懇ろに教導かれたる中にも、あづかりをれる原の身にとりては一しはうれしく、さすがに若き男女をあづかりて、其間に身持のあしくなることもあらむ、親御につけてもすまぬことゝ思ひしに、かくはめらるゝこと、預り居れる吾も面目ありと、あふ人ごとに談ひぬ。

朝露（續）

柳子
櫻子

此處は主人の書齋、二疊一間の床には、抱一の櫻、山吹の掛物、花瓶はあれども花はなく、側の二重ちがひだなには、洋書の數々うづたかくつみあげたり。部屋の入口にかしてまりし愛子を見て、主人は、鼻下のひげをひねりながら

愛にすこし聞きたいことがあるが……又泣いたか。

星をさゝれし一言に、はつと思へどさあらぬていに、

いゝへ、ゐなかものゝことゝて、通りのさまの面

白く、只今もどなたかのおのり遊ばしたお馬車の御立派さに、思はずおりたちてながめましたので其のはてりか目にはいりまして……あゝまだお茶もさし上げませんでした、一寸入れて參りましやう

と、いふこゑもあはれに泪ぐみて、うつむきがちなるもいぢらし。

それじや茶をもつて來てもらはふかな

主人の一聲をよきしほとて、次の間にすべりいでぬ。

あゝ不思議だ、あまりおれが吉野を思ふせいか、どうも、あの愛が吉野に能く似てゐる、色こそ雪と墨との違ひはあれ、目つき鼻つきまるで吉野だ。吉野にも一人妹があつた。あの葬式のとき來たのを一寸見たけれども、おたがひになげいたときてあつたし、おれもきがつかなかつたが、もしもそれが……

と俄に口をふさぎてまなこの邊り赤になりぬ。をりからしとやかに襖を引きて、茶盆と菓子をさげて來りし愛子を、目もはなたず見つめ。心の中にて、あれが家へきたとき、桂庵は横山愛といつたが、吉野の妹も愛といつたやうに覺えてをる、……あゝかまふもんか、一つ聞いてみやう……他の事には、如何なる大事件も、更に迷はぬ松井海軍大尉も、此の決斷には苦しみぬ。

愛、すこし聞きたい事があるが……そこは端ちかだ、もつとこちらへ……

其の聲はいたくふるへたり。愛も亦、何やらんいつもに似げなき主人の、顏色もつねならねど、如何なることの出來しかと、おそれ〳〵いざりてすゝむ。

主人は徐に口を開きて

愛、おまへは、元から横山といつたのか。はじめは吉野といひはしなかつたか。

我がことを知るものとては、今此の世になき母と兄との外は、いちわるき叔母夫婦と、思ひつめたる心の中は、如何なる激動を與へけん。疊のみ見つめたるが、やがて見上げて主人の顔を守りつゝ

旦那様はどうしてそれを御存じで

返りごともつかず、問ともつかぬこの答に、主人はすかさず

それでは兄さんがあつたであろうな、エ、オイ、

あつたろう。

念を押せども答のなきに、こは〳〵ながら、雪の如きおりあしをこねてのぞけど、アヽ黒みがちなる目には、時ならぬ露みちて、さはらば落ちんごとくなり。こはよしなき事をいひ出でゝ、うらゝなかりし空を曇らせしよと思へど、折角此處までいひながら、口をつぐまんも、何となくもどかしく、主人はひるむ心をはげまして

愛、そう泣いては話も出來ぬ。そしておまへの兄さんはまう此の世にはゐなかろうな。

今まで、こらへ〳〵し涙は一時にわきいでゝ、せきとめんよしもなし、袖もてかほを覆ひ、身を疊になげてすゝりなきになく。

主人は此のさまに少し氣を打たれしが、わざと聲をはげまして

泣かんでもいゝ、わかつた、それならおまへ愛は……おれはおまへの……友だち、おまへの兄さんは一處に學問をしたり、一つ家に住んで極くのなかよしだつた、兄さんがなくなつ時は、どんなに悲しかつたろう。おまへのおつかさんにも

一度お目にかゝつた事があつた。おまへにも子供のときあつたことがある。それにつき少し聞きたい事があるが、ヱ――おまへはね――アゝおれにはどうもいひにくい、此を見てくれ。

と、ちがひ棚の戸棚より出したるは、男にはふさはしからぬ文庫なり。愛子は此を見つめたるまゝ、嬉しさ、悲しさ、なつかしさ、萬の感情、小さき胸にあつまりて、目許のなみだふきもせで、主人と文庫をかはる〲ながめしが

それではあのう、旦那様は、兄さまのお仲よし、おつかさまにもおあひあそばしましたとか、又私もお目にかゝりましたとか、私は一寸も存んません。マアこんな嬉しい事と御座んせん。これからは、勿体はございませんが、旦那様を兄さまと思つて御奉公いたしませうに、私をどうぞ妹ともおはしめして…………

頼みなかりし身の、爺に味方をおしうれしさ、今までのかなしさはどこへやら

それでも愛、なせ横山といつて、吉野とはいはなかつたのか、若しも横山といふ家に、よめにでもいつたのか。

愛子はきつぱりと

いゝへ、それにはいろ〲込み入りましたわけが御座い升、こんなに下女奉公をいたしまして、父の名まで汚すにしのびませんから、母の腹ちがひの弟が、他家へ養子に参つてをりまして、其の名を横山松二郎とまをして、丁度東京にをりますから、母がなくなりましてから、別にたよる處も御座いませんし、はる〲参りますと、その叔母といふものはもとは泥水に染まつたものとやらで御

座いまして、私を邪間にいたし、藝者にしてしまふと思つて、じぶんの養女のやうにして、名も横山といはせました。私はそんなものになるのはいやで御座いますから、きゝ入れませんので、とは〳〵下女奉公に出されました。其の折元の姓をなのろうと存じましたけれども、いや〳〵、いやしくも海軍々人の娘が、下女奉公にと申さるゝもいやで御座いますから、そのまゝにしてこちらへあがりましたんで…………

此も軍人のたね、いさぎよくこたへぬ。

アゝそうか、それですつかりわかつた、早くそれを見てくれんか、アゝ頭がすこしもや〳〵してきた、庭を少し歩いてくる、其の間にこれを見て…

といひすてゝやをら立ち出でぬ。愛子は何ならんと思ひつゝ、ふたをとれぞ、あらなつかしや、こはまがふかたもなき母の手跡。松井道子さまみまへに、清子とあり。かゝのさまのれて。マアどうしてこれ家にあるんだろうとひとりごちつゝ、封の切目より中の手紙をひきいだせど、此はいつものとかはりて美しくかゝれたり。

愛子は口のうちにてよみもてゆきしが、如何なるゆゑにや、顔に時ならぬ紅葉をちらしぬ。ぞたりと落ちしものあるに心づきて取り上げみれど、なにゝやらん、紙もて幾重にも〳〵包みしもの、展き見れど、あらはづかしや、これぞすこしもかはらぬ、我がをさなかほ、十三のときに、なきかゝりてうつしゝ寫眞。

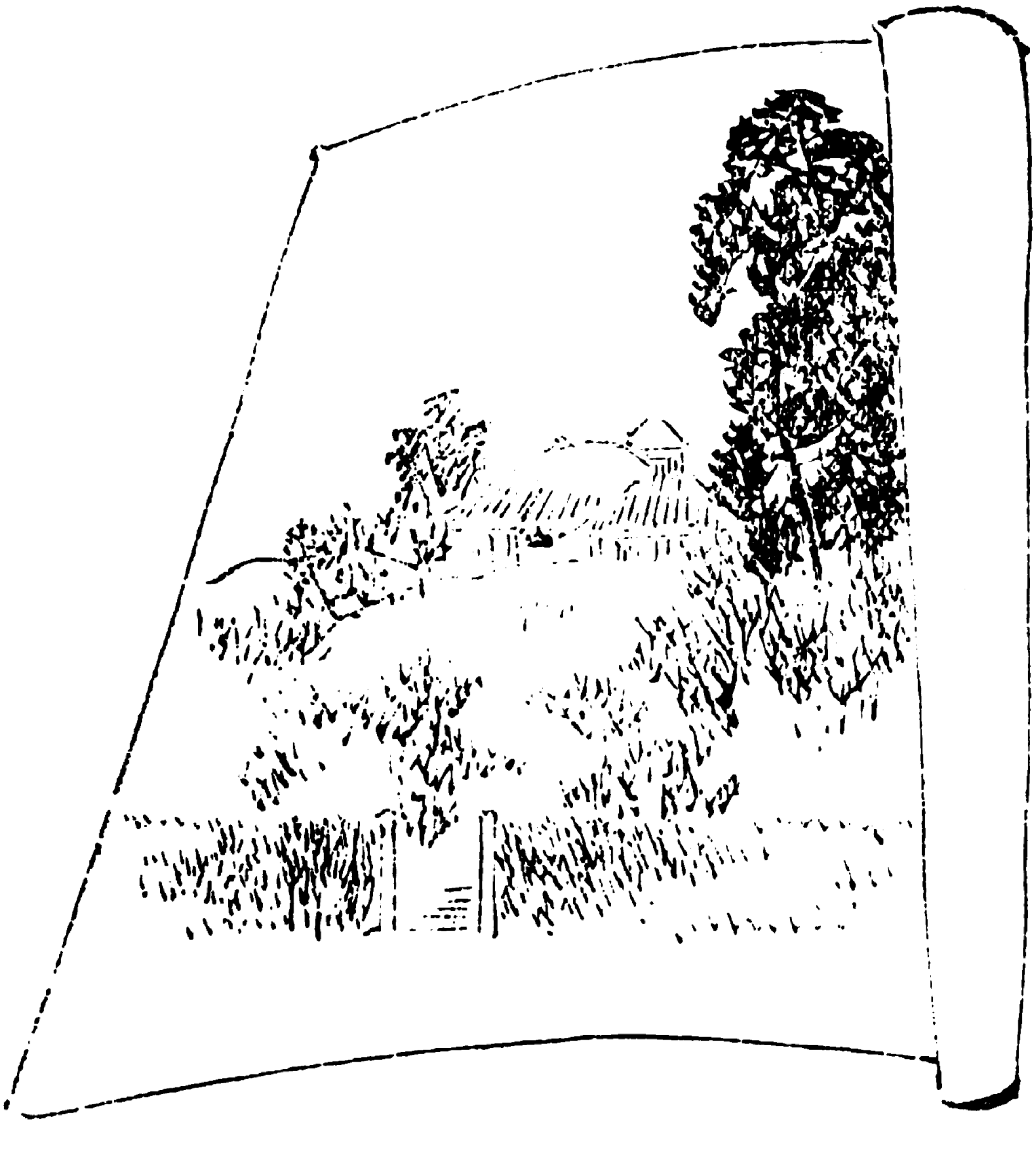
マアいやだ、かあさまは、こんなものを送りになつて

東京二十四景（十八）

草の屋主人

大森八景園

東京の近邊にて、梅の名所の尤もすぐれたるは、杉田村なり。東京よりは十里にあまれり。横濱まで滊車に乗り、それより舟にて達することを得べし。山と海との間の、一村はみな梅にして、數十町ばかりの間、淸香あふれ、古寺の蕭散なるは更にも云はず、農民の柴垣、あまのとやま、いとゞゆかしき心地す。近く東京に接しては、龜井戸の臥龍梅、小村井の江東梅、木木川梅園、百花園、銀世界、蒲田梅林、小向井梅、原村の立春梅などその數いとさはなれど、山海の景を合せて、やゝ杉田の趣を得たるものを、大森の八景園とす。大森停車場より打仰ぎたる丘やがて是なり。その側の坂路を八景坂と云ひしこと、江戸名所圖會に見えたり園の名もそれより取りしものなるべし。既に八景といふより、蒲田の落雁、六郷の夕照、富士の暮雪など、あぐるもわづらはし、瀟湘八景より取り來れ



るは、名所のならはしとぞ聞えし。一帯の丘のそゝりたちたるは、さながら屏風の如くなるに、麓より頂にかけて、梅の花滿ち、緑の松もまじれるは、屏風にかける畫とも見るべし。路は斗折し、花間を縫うて上る。丘の上はいとひろやかなる芝生にして、一方にまた梅林あり、擴大なる休息所、茶屋などあり處々にこしかけすゑたり。梅の香を身にしめて品川大井、大森、蒲田などの村驛を見下し、海をへだてゝ遙に總房の山をながむるにも、まづゆくものは心なるべし。一條の東海道、馬行き人來る。鈴が森は名のみ殘りて、磯邊にたちつゞきたる松の並木の上を、舟のゆくも、いとをかしきながめなり。汽船は行き、帆かけ船は坐り、汽車は走る。渇して茶を呼び、疲れて芝生に眠るも、都の塵にうもるゝ人にはそゞろに仙境すべし。

朴平（十六）

白魚女史

百代が呼べども、尋ぬれども、朴平の見えぬは道理。彼は何時になく一夜を外にあかして、其の日もまたくれ行くに、なほ歸り來ぬ主人の上をたづねて、春野の家へとさして出でたるなり。朴平は、とにもかくにも百代が心を安めんとて、たゞ昨日は春野方へゑひふし給ひしならむ。今日はまた梅見にさそはれ給ひて日をくらし給ひてならむ。彼方へ行かれては、二三日はども歸らぬ事は、昔よりもをり〳〵ありたれど、今度も必ずさる事にてぞと、口には云へど、如何でかり心おひし春野様の處なれぞとて、自ら行き給ふことは、よく〳〵たまさかの事、それも歸りは日を暮らし夜をふかしてなどいふ事なく、まして一夜をあかし給ふなどは夢にもなかりしを。さりて

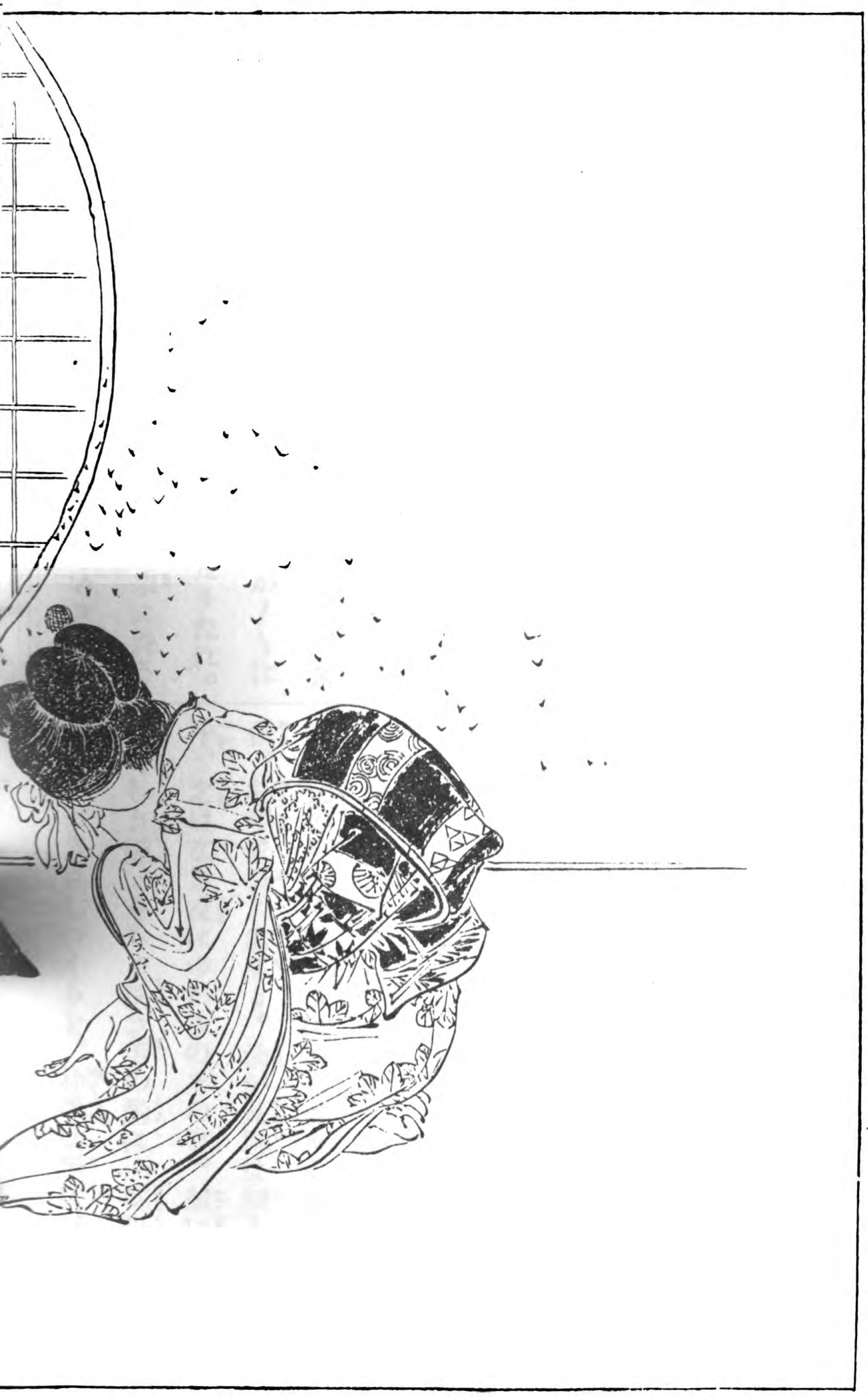
も、此の頃の他出がちのをかしさよ。必ず百代様を呼び迎へ參らしたるを面白からずればしての事ならむ。さりとても、かゝかりにやさしう、萬事に御心の限りをつくしてつかへ給ふ百代様を、あまりにも心強き若殿、今少しはうちとけ給ひても、書見にさはるべきにもあらぬにと、ひとり思ひ沈む部屋のうち、早やくろうさへなりしに、ます〳〵かきくるゝ心。何とてかくはれはすらん。さては今日もまた歸り給はぬにはあらずや。それに、心にかゝるは、先きつ日、濁江にも蓮の清きありと心ありげに云ひたまへる言の葉、耳にとゞろきたる事さへ思ひ出でられて、それや、これや、心にかゝり、あるにもあらぬ心地すれど、かくて思ひたどらんよりは、春野をたよらど、事のよしもわからむ。かつは、所詮我が詞のみにては叶はねど、春野をたのみて、かたくなる文雄の心をなだめもらはんものと思ひては、百代の知らぬ間にと、ひそかにひとり春野の方をさして急ぎ出でたるなり。

こゝぞと云ふに、やがて留むる車より、まろびぬどかりに下りたちて、急ぎ訪へど、家は常に似ずいと靜かなり。さては、まだ歸られぬにやなど思ふ折りから、下女のたつる、手らんぷ片手に立ち出でゝ、あな朴平どのか、めづらしや、何の用事のありて、御主人のお留守にと、いぶかしげなる下女のあいさつをきゝもあへず、さてはまだ歸らせ給はぬにや。何處へか行かれたる。杉田にか、梅見にや。さるにてもはや歸らせ給ふほどならんをと、獨言のやうに云へど、なほも下女はいぶかしげにうち守りて、さては、朴平殿は、未だ知らでか。京都へ、此處の御主人の、先き頃より行き給へるを知らでか、花の

頃を過ぎねど、多分は歸り給はざらむ。文雄樣は、とくに知りての筈なるを、朴平どの、一言もまだ聞き給はざりしか。をかしき事やなど笑ひかたる下女の言葉に、朴平は春野の旅路を知ると共に、いよ〱主人の事のおぼつかなく思ひまさり、さる事ありてかと云ひしのみにて、つく〲と思ひ沈むに、下女は何故とも心付かず、殿にはお留守なれど、まづ上られよ。久しぶりなれど。さるにても、しばらく見ぬほどに、まげのつやのいとしううつくしうなられたる事よなど、氣も言葉も輕げに微笑み云へど、朴平は耳にも入らず、力なげに腰を玄關に下ろしたるまゝ、首かたぶけてよく〱思案にくれたるけしき、下女はそれを知るや知らずや、ぬるくはあれどと茶などくみ來りて、朴平殿、御主人は此の頃も梅屋に行かれてにやと、下女の問ひに、朴平いぶかしく、梅屋とはと問ひたゞすを、下女はほゝ笑みながら、向島の梅屋、朴平殿はまだ知らでか。小千代とやらん云ふ娘を。あれほど御勉強三昧に餘念なく、かく申さむ口さがなきやうなれど、此方の殿さまも、をりふし彼れは石か木のやうな人だと仰せられしほどの文雄樣なれど、うつくしき色には、よく〱染まり易き人の心にこそ。此の正月頃も、たび〱通ひ給ひしやうなるが、朴平殿にも似ぬ。それを、つゆ知らずでおはせると、口輕く語りつゞくる下女の詞に、まさかに、さることはと思ひたのみたる朴平の驚きは云ふもかりなく、向島、淺草の彼方の向島にてか、何とか云へる家の名。梅屋、〱、向島の梅屋ときゝたしかめたるまゝ、いとまごひもせず、春野の家を走り出でゝ、賃をも問はずに人力を雇ひて、夢心地に淺草の幾大路小路をすぎ、堤を幾丁か

行けど、閨よりさぐる軒の提燈にても、見るよりあやしく思はるゝ家の門、梅屋とあるに、さはいへ、ものしづかに訪ひて、小千代といふ女子衆にあひたき事ありてまゐれる者なりとつぐれど、朴平の顔より足さきまで、いぶかしげにうち守りたるまゝいらへもせず。

朴平はなほおだやかに、おのれは小千代殿にゆかりあるもの、急用あれと云へど、彼方はなほ何をかとけぬげ、さらば、しばらく、今さりがたき客人の來たまひておはせどなど答ふるほどに、もとより奥の遠からぬ家なれど、彼方にも早くきこえけむ。文雄は見ねては惡るしと憚ることもせず、なか〳〵に自ら聲あげて、やは朴平か。ようこそは來たりたれ。此處へこよ。大方我の歸りを案じて、尋ね來にたる者ならん。いと遠き路を、退儀なりしよ。いざ此處へ來よ。春とてまだ馴れぬ更衣の空、川風はさこそ身にしみてならめ。いざ風引かぬ妙藥、ひとつとらせんなどと、家にある頃とは、天地をかへしたるけしき。朴平は、あな若殿といひたるが、はや涙になりて、文雄が酒宴の座敷近く泣き仆れ、さては若殿、あまりにはあさましや。いつよりかゝる御心にはならせ玉へる。餘りのおん有樣よ、あさましやとのみ泣けど、朴平泣きそ。我も男なり、濁江に入りしとて、濁りし人には馴れはせじ。物な思ひそ。まづ一杯汲まずや。やよ小千代、酌してやれよ。此の翁は、我が父の代より心一つにかしづきくるゝわが家の忠僕、朴平と云ふ翁なり。汝が兄御は知りてなり。朴平、之はなき友にゆかりのものぞ。誠に濁江にもめづらしき蓮、そちも清き手の酌に一杯汲めよと、なほさかづきさしつくるを、朴平は手にだも取らず、





見ひともせず。はら〳〵と涙をこぼしながら、きつと形容あらため、けがらはしく候、若殿。人の家の僕はすれど、朴平は人間。猫風情の汚れたる酌は入りませぬ。酒はしくど、此の手にて汲み候、何に、汚れたる猫風情に。さても、今日の今日まで、夢にもかゝるれろかなる君とは思ひもかけざりしを、口惜しや、若殿、いつ此の小猫などにたばからされ給へる。御両親の御遺体を、何とては小猫などに汚されんとし給ふ。口惜しう候、浅ましう候、朴平、此の朴平が、さては濟みませぬ。亡くなりたまへる大殿に、母御前に、此の朴平が濟みませぬ。若殿の御出世を、やがてまからむ後の世のみやげと、それをのみ老の身のたのしみとも思ひてなるを。あまりのくやしさよと歯をかみしめての恨み泣き。

さやうに思ふは道理なれど、朴平、己れもさばかりの事、知らぬものにはあらず。濁江にそまぬ、蓮の花は、なれも知りてならん。我とても最初は、なれの如く、たゞ女子は汚きけがらはしき者とのみ思ひたれど、よく〳〵本のしづく汲めど、汲むほどいさぎよく、可憐の身のはて、露に雨にいとはれかしづかれし庭の撫子よりは、中〳〵に清きいさぎよきふしのみの見ゑて、あはれにればゑてなり。此の小千代の身の上は、やがてぞ語らむ。何はとも、一杯と、なはさかづきさしつくるを朴平は唯あさましげに、恨めしげにうち守りて、はら〳〵とこぼるゝ涙をぬぐひもあへず、愚に候、若殿、露を玉とあざむくが、蓮葉の習ひ。あさましう候とばかりにて、言葉もつゞかぬなげき。

文林



岡若菜　徳大寺實則

吹く風ものどかになりぬ岡のへの
うめみがてらにわかな摘てむ

河上春月　近衛忠熙

濁りなき水にもかげはかすみけり
かもの河せのはるの夜のつき

雪中鶯聲　久我建通

くれ竹のねぐらの雪はそれながら
春にぞかへるうぐひすのこゑ

早春海　壬生基修

わたの原春きにけらしあま小ふね
漕ぎゆくすゑもうち霞みつゝ

落梅浮水　前田利嗣

さゝれこす波と見るまで梅のはな
散りこそ浮べたにがはのせに

春夜雨　交野時萬

春雨のしづかなる夜はうたゝねの
ゆめにもさはる音なかりけり

山路雉　黒川眞頼

遠近にきゝすなくなりあさがすみ
おぼつかなくもたてる山路に

巴女　宮地嚴夫

ゆみとりの數にもいりし手弱女の
　柄のひゞきのたかくもある哉

垣梅　植松有經

海のはなかきねのうちに咲ながら
　にほひはよその物にぞありける

行路梅　鎌田正夫

遠しとも思はぬものはうめのはな
　さきつゞきたる野路なりけり

待鶯　諏訪忠元

春風になびきそめたるあをやぎの
　いとゞまたるゝうぐひすの聲

梅に鶯　蜂須賀隨子

花とりの春のこゝろをうつしゑの
　ふでのにほひもおもしろき哉

松上鶯　鍋島榮子

いく春もかはらぬいろの松が枝に
　千代の聲してうぐひすのなく

霞添山色　前田朗子

梅さくら匂はぬやまもたちわたる
　かすみぞ春のいろは見せけり

森鶯　柳原愛子

春がすみたち出て聞むうちわたす
　のなかの森にうぐひすのなく

朝春雨　小池道子

おき出で向ふかゞみぞくもりける
　此あさがすみ雨にかあるらん

早春雪　北島以登子

春のきし庭のゑは生もさねかへり
　ふたゝび積るけさのゆきかな

朝鶯　松平健子

打かすみかげればろなるわさ月夜
志らむのきはにうぐひすの鳴

のどかなる日濱べにいづ　佐藤艶子

入百日行はまべのまつもかせ絶て
かすむ春日になりにけるかな

春鶯呼客　鶴久子

うぐひすの鳴野邊遠くきて見れど
霞がくれにうぐひすのなく

春神祇　中島歌子

鶯のなくこゑすなりゆきをれの
れとのみ聞しひねのやしろに

梅薫風　諏訪晴子

梅の花さかりをとめてゆくみちに
まづこそかをれ春のやまかせ

都の友のもとに　師岡須賀子

ともに見し垣根の梅や咲きぬらん
つゝみてれくれその匂ひだに

梅櫻にはふをみてもわすれずぞ
越路の雪をれとづれてまし

加賀國の白山を日毎に三階よりながめて　仝

夢にだに越の白山しらざりき
雪つむさまをかくて見んとは

鶯の聲をきゝてよめる長歌　酒井喜雄

春きぬと　つげもやらぬに　あしびきの　山
谷こねて　うぐひすは　きてをなくなり　ろ
の聲は　ききのよろしく　その聲は　志らべ
とかしく　つま琴の　ねよりもあやに　ふく

笛の　ねよりもたへに　きのふけふ　はや里なれて　たかむらに　ねぐらさだめて　梅にうつり　松に木づたひ　庭のおもを　とほくはさらず　ゆふすゞの　かゆきかくゆき　日ならべて　なくなる聲を　きけどきけど　あかれぬものは　鶯のこゑ、

餘寒

三輪義方

夜半ばかりより、吹出でたる風、今朝も猶やまで、いみじうさえかへりにけり。妻戸おしやれど、軒近き水船の、氷れるにぞ、まづ打おどろかれぬる、殘少うなりにたる、庭の雪の、今更に、友まちがほに見え。小草の、わづかに萌めるは、春めきたるものから、かつは、さびしげなり。梅の梢は、吹しをられて、ほゝゑみたる花も、凋める心ちし。わづかに開けそめたる、柳の眉も、ひそめるやうなるは、結べる露や、氷りにけん。すべてすべて、あひなう、日頃、長閑やかに、なりもてこし氣色も、いづちへか、いにけん、いとさう〴〵し。某がしの岳、又白うなりにたるはなど、人の言ふも。ふと、身にしむ心ちのせらるれど、屏風引つぼね、爐火かきおこして、鼎の湧くを、待つはかなし。とかうするほどに、日の氣色、少しなほりて、風の音も、聞えずなりて、窓の外の　叢竹に、鶯の二聲三聲、打出でたるに、今ぞ、春心ちしぬるもをかし。



●かしこき御孝心　いまさらならねども、九重の雲のあなたよりもれ聞ゆるを謹みて、記しまつらんに、　天皇陛下には、このほど大御けしきもつねにかへらせ給ひて、御床わけの御式も行はせ給へるが、つねは、夕の大御饌には、正宗あるは澤の鶴などいふ御酒をきこしめし給ふなるに、去し一月十一日このかたは、一滴だもきこしめし給はねど、侍臣のつかさより、今はつねの大御身にならせ給へど、つねも好かせ給へる御酒、いさゝかはきこしめし給はん方大御爲なるべしときこえあげ奉りしに、陛下には、否とよ。皇太后陛下の崩御あらせられしは、終天の悲なるに、御病の故とはいへ、御葬の御式にすら立たざるは遺憾このうへもなし。さるをいまだ百日の御祭もきこえざるに、いかに嗜好すればとて、酒杯を御手にせんやとのたまひしかど、侍臣も侍從のつかさも　聖慮に感泣し奉らぬはなかりしとなん。記し奉るもいとかしこしや。四千萬の臣子、庶幾くは大御心をもて心とせよ。

●英照皇太后御饌　は、宮中より泉涌寺靈明殿に御奉納あらせらるべきにて、泉涌寺より、御歷代御饌調進者なる京都寺町佛光寺上る乾濟太郎といへる人にこたび内命ありて調進せしむべしといふ。さて

尊儀の御文字は有栖川威仁親王殿下の御親筆にて英照皇太后尊儀と黒地に白字をもて彫刻し奉るべく、御形はこれまでの門院方のよりも大きくて、雲形其の他御模様まではぞく〳〵先帝のにひとしく、三重線にして、天には雲形に日、蓮臺の下に雲鳳凰兩袖には、唐艸に菊の御紋章あり。これ何れもすかしばりなり。御臺は、第一のは仰向俯向の蓮花、第二のは高欄形四柱には蓮花にて大珊瑚の寶珠をいたゞき、第三のは、菊唐草のすかしばり、第四のは、わらび獅子に牡丹のすかしばりなり。なほその下に一重二重とあり。さてその下は雲水龍のすかしばりの兩の腕を、靈獸の脊に負へるさまなり。天地の總高さは、三尺一寸餘なりともれ承れるがまゝかくなん。

●英照皇太后御五十日祭　本月一日行はせられたる御陵前御五十日祭の御次第を承るに式部屬、齋官補等は、午前七時泉山に先着せられて諸種の準備を整へられ、十時頃より、齋官、御喪主殿下、御代拜の方々つゞきて御參着。十時三十分より御式御拜あり。御代拜は、九條公　皇后宮御代拜は、滋井在子　皇太子御代拜は、粟津主殿助　內親王方御代拜は、吉見梅內侍にて式全く終りしは、十一時五十分なりしと。

仝日、青山御靈殿にても午前九時より仝し御祭を行はせられ　御代拜として鍋島宮中顧問官　皇后陛下御代拜として高倉典侍　皇太子殿下御代拜として前田東宮侍從　內親王殿下御代拜として姉小路掌侍、孰れも御代拜御玉串を捧げ奉られたり。

●東京府高等女學校　は、本紙廣告欄に見えたるか如く、目下生徒募集中なるか、同校は普通高等女學校の程度を一ヶ年延長せしものにして、府縣立高

京女學校中、最高尚なる課程を敎授し來りし上、二月十六日、補習科の課程は一ケ年とありしを以て、同科の卒業生は、他府縣尋常師範學校女子部卒業生以上の熟練と學力とを得べき筈なり。又去歳七月、神田區錦町に移轉開校の後、生徒頓に增加し、本年の如きは、校舍狹隘の爲め、一年生を募集せざることゝなりし由なり。

●東京女學館　虎の門内なる同館にては、今回大に生徒を募集する由なるが、聞く所よすれば、同館は、優美高潔の淑女を養成し、兼て英語の操縱に熟せしめ、傍ら西洋交際法の一端をも心得置かしむるを以て目的とせる趣にて、敎員には、本邦婦人の外に敎育に經驗ある數名の英國婦人を聘して、專ら其の敎授に從事せしめ居るといふ。されど、世に、同館を宗敎臭味の學校と思ふもの ある は謬見にて、殊に現館長辻新次氏就任已來、益規模を擴張し敎程を改良し、高等女學科、高等專門科、撰科、特別科、裁縫專修科等の諸科を設けて生徒の修學に便し正科の外には、挿花、編物刺繡等の手藝科を設け、和洋の割烹などをも實習せしむるといふ。

●奈良高等女學校　は、昨年四月校舍新築のことを縣會にて議決せしが、直に大佛殿の側に建つべきにて、工事中なりしがこのほど落成せり。されどこん四月のはじめ、第一回の卒業式をかねて、落成式を行ふべしとなり。女子敎育の盛になりゆくことうれしきかぎりなり。

●高知縣高等女學校　は、かねてよからぬ聞えもありしが、とりたゝさんとてにもあるべし。こたび知事のもとに、さし出せる校則中の一節なりといふをきくに、

衣裳は木綿物に限ること、
髪には飾りを懸けさる事、
白粉は全く廢する事、
但し御化粧にするは先つ差支なき事

質素を旨とすべき心なるか、はた他によるところありてにやあらん。但書いと心得かたし。

●子守教育　岩城の國の中村町の尋常小學校の訓導に田村くに子といふがあり。このわたり子守教育の法のくはだてなきを、あかぬことに思ひて、こゝの校長某とはかりて、この學校の内に子守學校といふを設けて、日ごとに、尋常生徒修業の後、二時間つゝ子守を集めては、修身、讀書、算術などをいと懇に教訓したりしに、このほどは、子守六十名ばかりになれりといふ。かくて、貧究にてせんなきものには、石筆紙墨などをめぐみてはげますに、みなよくはげみつとめて、日に月に子守の風習よきになほりゆけど、その父母をはじめて、みなよろこばぬはなしといふ、いとよき企なり。

●學生の近眼　近來學生に近眼多きことは、何人も能く知る處なり、されど此際、學校教育に於ては深く注意すべきは云ふまでもなきことなれど、學生各自も亦之に陷らざる豫防方を取らざるべからず。今醫學博士三宅秀氏の女子高等師範學校に於ける、衛生講義を見るに、この事につきて述べられたる條あり。其の要點を摘んで左に示さん。

不注意なる學校教育の近眼を作ることは誰人か保證するの今日に至ては、衛生家は勿論、教育家も大に之が豫防に注意するに至れり。

歐洲中、獨逸は最も近眼多き國にして、教育ある獨乙人を畫くには、必眼鏡を懸けしむる位なり

左に小學校生徒近眼の統計を掲ぐ

佛蘭西　百人中　四十六人
瑞典　仝　五十人
獨乙　仝　五十七人

墺地利にて、近眼の原因を調査せしに、筆記簿或は筆記板の不良なること主なる原因なりと。獨乙にては、近眼の多少は、授業時間と躰操時間との比例に關することを調べ出せり。

我が國女學生にして、明治女學校は八十二人中（平均年齢十八年強）四十二人。成立女學校は四十五人中（平均年齢十七年弱）十六人。共立女子職業學校は二百八十七人中（平均年齢十七年強）百三人なり。

都鄙男女の別なく、一般に、學級の進むに從つて近眼の增加する勢は、何れの學校にもあれども、攝生の方法によりては、防ぐこと難からざるべし。一旦近眼となりて、漸く進むときは、視力衰弱して、如何なる眼鏡を用ゆといへども、常人の如く明に見ること能はず生涯の損失となるものなれば、學校教師たるものは、一層之が豫防に注意せざるべからず。

之が病理によりて考ふるに、學校近眼は、年少者の眼を多く使用するより起るものにして、机低きが爲に頭を屈して、爲に頸部を壓迫し。光線不充分なる處にて讀書、又は細かき手工をなし。書籍の文字小に過ぎ、又其の印刷の不鮮明なる。眼を使用する時間の持久する等近眼の原因となるものなれば、教具に注意し。細小なる文字を讀み、綿密なる細工の後には、戸外に出して遠き處を見するやうにし、書物に頭首を近寄せて見る癖ある者は

殊に之を矯正し、少しにても近眼の徵あるものは醫師の診察を受けしめて、假性ならば治療の目途あり、若し又已に眞性の近眼となりたるものは、更に注意せざれば、胸を壓して机に凭るが爲に、肺病となり。又腹部を壓迫する故に、腸胃病となることあり。

●終りよかれかし　とねがふは、空名のみかまびすしくきこえて、其の實なきか多けれどなり。このほど播磨の國の生れにて、橋本せん子とて、ことし二十二歳なる女、實業に志ふかくして、年ごろためし、試みてさとり得たるふしありとて、養蠶の方法をときて中國のわたりをへめぐりて、去し一日鳥取市にて、一人演說をせりといふ。よきことなるはいふも更ながら、年もまだわかゝれど、血氣の勇をいましめて、實功あらんことこそねがはしけれ。

●花のさきがけ　都にはあらず、愛媛縣、北宇和郡の丸穗村字千本松といふ處のれくに、一もとのふるき櫻の老木あり。こは舊宇和島侯のめでられし花なるが、このほどさきがけてさきそめにたれど、杖をひきてとふものもありといふ。

●若草山の芝燒　南都、わか草山の芝燒は、來ん廿二日頃天氣晴朗なる日を期して、消防組總出にて燒拂ふよしなり、今其の由來を釋ぬるに奈良の若草山は、九折山、葛岡ともいふ。春日御蓋山の北に連り、武藏野の上にあり。三層なる芝山なれど、世俗みかさ山といへり。

むさし野をけふはなやきそ若草の
　　つまもこもれり我もこもれり

古今抄に、此歌は業平朝臣二條の后をぬすみて、奈良の京へ具しける時に、后のよませられし歌なりと

あり。また夫木集に

今も猶妻やこもれる春日野の
　わかくさ山に鶯ぞなく

此若草山は、四十町歩餘の廣濶なる芝山にて、古き昔より、毎年一二月のころ、全山一時に燒はらふを例とす。幕政の頃は、奈良奉行所より、數多の役人東大寺興福寺の僧侶等立會にて、儀式おごそかに燒き拂ふ事となれり。傳へていふ、此山は東大興福兩寺の境界にて、兩寺所屬の爭論絶えず、竟に最寄大寺の仲裁にて、いづれの所屬ともせず、所謂仲人預りとなし、樹木を栽植せず、年毎に燒拂ふを例とせるなりとぞ。其事は興福寺記錄中に、

若草山並に鳥居池の儀は寛延三午年大東寺と及爭論の處於京都御役所西大寺唐招提寺法隆寺三箇寺へ取成被仰付兩寺共於論所有來法用是迄の通相勤非常の儀有之候者御公儀御取計被成下候樣從三箇寺被申上寶暦十辰年十二月內濟仕今以御公儀の御取計に御座候云々

此記錄は、文政年代奈良奉行所に差出しゝものなりと、これ傳說の起因する所ならんか。また二條后の詠歌の意を考ふれば、遠き一千年以前より武藏野を燒しこと、及び若草山といふこともあきらかなり。維新の後も古例にならひ、毎年燒拂ふといふ。まつ數名の警部數十の巡査を引率し、消防夫は各組毎に列を正し、公園係は數名の園丁と倶に設けの場所に參着す、而して巡査園丁消防夫は、東南北に連なり森林火防線路に配置す。各手に松の枝、又は杉枝或は馬醉木を携ふ。警官の號令に應じ、山麓より一齊に枯芝に火を點ずれば忽ち箭を射る如き勢ひにて燃登る。見る見る火焰天を焦し、黑烟日光を覆ひ、そのさま恐しくもまた凄じ、觀る者おもはず戰慄す

ど、火の防線路に達すれど、各携ふる葉枝もて打消す。僅々一時間餘にして全山一變して黑色となり、實に一大壯觀なりといふ。

●十六日櫻　といふが伊豫の國、和氣郡御幸村の字山越といふところの龍穩寺といふにありて、每年陰暦にて正月十六日に花さくを例とせり。ことしもその十六日にあたれる二月十七日といふに、時をたがはず咲き出たりといふ。さてこの櫻は、むかし一人の孝子ありしが、親重き病になりて、命今日あすといふになりて、年ごろこのめる櫻の花を見て死なは死なんとて見まほしがるを、子いかにもして、咲かせてんものと、願をこめしかど、正月十六日といふに咲けりしに、後必この日にさくなりといひ傳へたりとなり。

●童女の螢雪　雪をつみ螢をあつめて文よみきといふむかしかたりを今童女の上にきく、いとあはれなりや。京都西陣幸町通二丁目幸小橋北詰東へ入る田中じうといへる人の家の二階をかりて、いとかすかに住へる姉妹の童女あり。姉をしげといひて、ことし十三歲、妹を八重とて、ことし八歲なり。母をはるとて年四十三なるが、一昨年夫を失ひてより世にたつきを失ひ、こゝかしこの市場に出てゝは、菓子なとうりありき、いさゝかの料を得て辛くも二人の女の子をはぐゝみ養へり。姉妹も母の苦勞を思ひてより、ほど近き難波村なる燐寸製造所に通ひて、姉は一日に六錢、妹は一錢五厘づゝの賃金を得て、晝は學校へ通ふこともかなはねど、高臺尋常小學校長なる神戶禎吉氏にたのみて、このいさゝかの給分を學資として、夜學に通ひて、敎をうけ、一心不亂に勉强するを、神戶氏も末たのもしきものと思

ひ、こそのふゆこのありさまを府廳に具申し且紙墨筆などを與へて賞めしかど、二人も感激して一きは出精するに、折もをりとて、去月のころより母は病の床にうちふしければ、商もえ營まれず。さらでも貧しき母子三人は朝夕のけぶりも思ふまゝには立てかねて、心ばかりはあせれども、何とてせんすべもなければ、姉妹二人は母の枕邊にありて看護ながら夜はいよゝほそりゆく燈火をかきたてつゝ讀ものゝ復習をするなど見る目もあはれなりとて、近き西道頓堀に住める醫師水野彦治氏は、はるか全快までは、無料にて投藥すといふ。あはれなるものもあれどあるなり。身おこりを極めてそかむくひによりて究乏におちいりたるはしらず。かゝるはまことに寄るべなきかなしきものなれど、暖かに着、甘きにあかん人たちは一椀を減じてだにめぐみてよかし。

●かなしき孝子　人ごゝろ浮薄に流れゆくを何處の瀬に、何をしがらみと塞きとゞめてん。かゝる世にかゝる孝子あるいとうれし。年も盛りになり、身も世の業にかなふべくのびやかになりながら、父母の心をいたむるも心つかで、逸樂にふけらんもの、耳を滌め容をたゞして、きゝとりて心をいれかへよ。富山縣新川郡御座橋村三番地の平民高橋助五郎といへるは嘉永六年の生れにて、横濱長者町六丁目に籍をうつし、今は戸太町太田千二十九番地に住めり。妻はせいとて年は同じく。長女をきいとて十五歳になれり長男を淺次郎とて十三歳になり、次をつたとて十歳になれる子三人をもてり。世をば安けく過し來つるものなるが、去し廿八年のころ助五郎ふと眼病を煩ひて、さまぐ\に醫療せしかども癒えずして遂に盲となれり。久しきほどの煩ひなれば家產もか

たふきて家計ゆたかならず。助五郎もにはかの盲どて萬心にはまかせねども、さてしあるへからねは、妻と、もに土車をひく人夫にやとはれて、ほそくもおやの烟を立つるを、長男の淺次郎天性至孝にて、日に勞力して骨身の瘠せやつるゝを見てなげかはしきことに思ひ、はじめのほどは、共にその場にいきて手助にとて立はたらきしが、去年の夏ころよりは、よろめきながらも父にかはりて自ら土車をひき父に後をおさせ母をばわが家におきて姉妹と共に内職などせさせて日を送りけり。もし過ちてつまづきなどすれど、わが脚の傷つけるをも、こらへて打かくし、まづ父をいたはるなどいとあはれにて、雨などふりて車ひかれざれど、山の手なる林に入りてたき、を樵り、をりくべては父母兄弟に寒をしのがせ、父の厠に通ふ折なども自ら手ひきなどしてみとることいと親切なり、かゝる間にも自ら禮節を守りてけなげなるさま見る人きく人みな感ぜざるなしといふ。さるをこぞの冬のほどよりは亦も母眼病にかゝりて、一しほ貧しくなり、藥を買はんすべもなきを、淺次郎も深く心をいためたるに、こゝの日の出町の醫師中島與佐吉といへる人きゝて、あはれなるものに思ひ無料にて治療し、なほこゝかしこより金子などおくりてめぐむものありときく。いともやさしき孝子にこそ。

●けなげの少女　兵庫縣福良町に、魚貨を業とする橋詰某といへるものあり。家に貯へたる財もなけれど僅にその日〳〵の稼ぎをなして、辛くも世を送りけるが、子供は女子のみ五人をもてり。長女の十七歳になれるは、他に奉公せしめて家に居らず、あとには次女の十二歳をかしらとして、みなをさな

けれど、女房は、これらの養育に打ちかゝりて家計の手助も叶はず、ます〳〵貧困に苦しみけるが、この次女の十二歳になれるは、名をおかつとよびて、性質もいと柔順なるが、幼きながらも父母の勞苦を見るに堪へかね、毎夜十二時過るころまで、蛤、あさり、などを剥りて、父か翌日の賣り物に供し、朝は四時頃より起き出で、茶を沸し、朝けをとゝのへてのち父を起し、晝間は母の手助して妹等の世話するなど、おとなも及ざさるはたらきに、父もその孝養を感じて、いよ〳〵家業をはげみけれど、貧しきながらも稍心やすくなりゆきて、一家睦しくくらしけるは、おかつのけなげなるふるまひによれりとて町内のものどもみなはめはやしけりとなん。

●國柄によりて　風習おのづからことなり。北あめりかのカンサスといふ州にては、婦人の官吏となるもの多くして廿の市町にて、市長よりはじめて、警部などまですべて婦人にて、學校の監督なども婦人を用ゆるといふ。さて次期の立法會議には婦人の參政權問題さへも起るへしときく。すさましきことよ。

●百花園の梅花　向島寺島村にて白ひげの森に近し。百花園とも花やしきとも又梅やしきともいふ。秋草及梅花をもてきこえたり。去年は隅田川の水あふれてあたりをひたせしが、その障もなく梅もいとよく咲きいでたり、紅梅なほつゝきてさくべし、まづ今やう〳〵眞盛りにて今の月末までは保つべし。都人の散策には閑雅にしていとよし。ひごろはげみつとめていとまあらばとふらへかし。賤からずもの〳〵しからずしていと高雅なるなぐさみなるべし。



三月五日兼題　餘寒

天

かせさゆるそらに雪げの色見えて
　春もよそなるこゝちこそすれ　三河國幡豆郡平坂町　石川きむ子

地

うすかすみたてどもさむき春風に
　池のこほりはとけんともせす　東京市赤坂區一ツ木町　羽田三緒子

人

軒ちかく梅はにほへどきのふけふ
　なほさえかへる風のさむけさ　東京府北多摩郡七十三番地　中桐杏子

人

なほざりに春やたちけん昨日けふ
　またさえかへる風のさむけさ　播磨龍野　眞鍋直子

秀逸（二十首）

うぐひすの聲もこほりて春のそら
　さえかへりてもふくあらし哉　佐々小翠子

白雪のふる枝のうめの香もさむく
　春ともわかぬはなのしたかせ　木川里子

うつみ火をはなれかねたる寒さ哉
　はるはこよみの上のみにして　丸岡三六子

散りかゝるこすゑの雪は袖の上に
　花と見えてもさむきはるかな　畠山百合子

はるきぬとたれもふ心のゆるみにや
　なほ肌さむしきさらぎのころ　日高かず子

あつさ弓春とはいへどいとやなぎ
　みだれてなびく風のさむけさ　舘脇ます子

青柳ははるのすがたにもえぬるを
　いつこに殘るさむさなるらむ　諸井くら子

春なからかすみもわへすふる雪に　吉村ふて子
のさはの水のぬるむ日もなし

さゑかへる春風さむくうくひすは　川田こう子
雪のふるすにねをやなくらむ

春といふ名のみ立ちつゝさゑ歸る　戸塚鐵子
さむさは冬にかはらさりけり

春風にいけのこほりはとけぬれど　大谷津綾子
寒さはふゆにかはらさりけり

風さゑて冬にかはらぬさむけさに　小島ろく子
花まつひとやわひしかるらん

霞むかとれもひ之空はゆきけにて　有馬たね子
かをらぬ花そかせにちりくる

春たてと風なほさむしきのふけふ　香川穎子
とけしこほりもまた結ひつゝ

風さむみ空にゆきけのいろみゑて　川崎晴子
春ともなきこゝちこそすれ

立ちそめしかすみもきゑて春もなほ　三笠嘉子
ゆきげにくもる空のさむけさ

昨日今日のどけき春のひよりにも　下田ひろ子
また肌さむくかせそみにしむ

春がすみ立てども雪は消ゑやらで　三谷きみ子
ひまもる風の寒くもあるかな

はるきぬとれもふ心のゆるひより　坂田きみ子
なほそてさゆるけさの寒けさ

立ちわたる霞もさゑてともすれは　藥師寺芳子
雪のはなちるきさらきのそら

（以下原稿到着順）

ほの〳〵と霞はそらにはへとも　住山幾子
まだ風さむしきさらぎのころ

けさはまたもとの寒さに立ち歸り　曾山道子
かすみうすれてあわ雪そふる

久方のかすみはなのみ立ちにけり　神田樂子
とすれど風にゆきのちりつゝ

はるきてもなほ風さむし薄かすみ　神田靜子
れそき年にもあわゆきのふる

さゑかへりはるの山かせはた寒み　西村虎子
ふたゝひとつる小田の水の

若水をうくるすゝりのうみまても　野田千代子
けさなほさむく結ふうすらひ

梅か香を誘ひそめたるはる風も　木村榮子
さゆれはまたもむすふ薄らひ

さえ歸りすきまのよかせ身に染みて　まだなつかしき閨のうづみひ　西村　芳子
あつさ弓はるともいはす風さえて　若くさやまにあわゆきのふる　楠　精子
立歸り空にゆきけの色みえて　月かけさゆるはるの夜あらし　島田　好子
薄かすみほの見えそめてさく梅の　花のかさむしきさらきの空　近藤　秀子
はるきても霞みもやらす山かせの　寒くふく日はふゆにかはらす　青木しげ子
はるもまたふたゝひ冬に立ち歸り　此のかせ寒くあわゆきのふる　高橋　信子
けさはまたとけし池水こほりつゝ　さえ歸りてははるとしもなし　秋園　露子
はるきても垣ねは雪にうつもれて　なほ風さむしみやまへの庵　白井　糸子
梅か香の匂ふ窓よりさきかけの　また肌さむきかせそふきくる　秋園喜久子
けふもまた空にや冬ののこるらん　わかくさ山にあわゆきのふる　細井　球子

立ちかへる空にゆきけの色みえて　あわたのやまに泡ゆきのふる　溝口　直子
あづさゆみ春ともいはす風さえて　あわたのやまに泡ゆきのふる　成田　延子
けさよりはさゆる嵐にまたもなほ　とけし小川のみつもこほれり　水島　良子
はるさむみ小田の氷のとけやらで　なほかけさむくうつる月かげ　松原　常子
大空はかすみなからもゆきふりて　ふたゝひ冬にたちかへりけむ　芝田　源子
はるの立つ心ゆるひにいとゞしく　のこる寒さの堪へかたきかな　吉川　貞子
たかさごの松に見そめし薄かすみ　はらふあらしの寒くもあるかな　町田　繁子
はるなからゆきをいたゞく梅のはな　にほふ色かのさむけなるかな　吉川　國子
はるの池の水はふたゝひ氷りゐて　去年寒さにさえかへりけり　中島　房子
空はなほゆきけの雲のさえかへり　春としもなきけふのさむけさ　中山　富子

春めける人のこゝろに似もやらて　牧山きよ子
猶さえかへるうらけしきかな

ふきこしゝ冬の名殘やのこるらん　山口やす子
霜かせさゆるきさらぎのそら

梅の花ちるかとみれはさえかへる　佐々有鄰子
みそらよりふる雪にぞ有ける

春風はれもひのほかにさえかへり　仁保　基子
みるもさむけき今朝の沫ゆき

冬の夕かつきしまゝのあつふすま　花山保江子
すてかねにけりはるのゆふべも

梅の花さきにほふ頃となりぬれと　花山　操子
こそのさむさやなほ殘りけん

春たちて垣ねのゆきは消えぬれと　星野かず子
かさねふすまのまた寒きなり

いたつらにすびつの炭も盡しけり　星野ひと子
つれ〳〵わふるはるの寒さに

冴えかへるさむさなからも鶯の　星野康世子
鳴く音のとけき朝な〳〵かな

はるなからまたさえかへる鮮空に　遠藤ふじ子
なほうつみひのもとそ戀しき

春なからまだはだ寒しやまかせも　福原　董子
さえのこりたる音をとゞめて

あつさゆみ春としいへど少女子か　伊藤　清子
そでふきかへす風のさむけさ

風さえてかすみもやらぬ春はなほ　石川　類子
親しまれけりうつみとのもと

春はたゞ名のみなりけり吹く風の　中山嘉壽子
かすみなからにさゆる寒けさ

遠山のかすめるかげははるなから　櫻井　花子
春としもなくさゆるかせかな

かき曇り雪のふれゝそけふよりは　瀬戸　榮子
またもや冬のきしかとぞ思ふ

梅かをるのきのしつくも音たえて　太田　貞子
たるひにかへる朝ほらけかな

春來てもまだしらゆきのふる里は　田島　龍子
かすみの衣かさねやはする

いつまでも冬の名殘や盡きさらん　美奈非與志子
霞むと見れはあわゆきの降る

さえかへる春の寒さにみなひとの　畠山　清子
花れそからむうはさのみして

若艸はもえいつれともかせさむみ　帛山ゆき子
のなかの清水ぬるむ日もなし

春なから園のうつみひわつふすま　帛山千代子
なほたのむべくさゆるそら哉

あたゝけくなりし日影をけさは又　永井さい子
雪けのくものとちてけるかな

初若菜つみたる野邊のはるかせも　吾妻　近子
さえかへりたるけさの寒けさ

さほひめのつゆの袖をふきかへし　柳田さと子
さえかへりたる風のさむけさ

はるといへと霞もたゝすかきくもる　木村みつ子
ゆきけのそらの風のさむけさ

雪きえぬ山邊のさとはふゆこもり　小曾根しう子
はるをもしらて過しつるかな

けさはまたかけひの水は凍るらん　水谷良久子
冬にかわらぬかせのさむけさ

春なからなほ風さえてはたさむし　杉浦　芳子
ゆきにやかすむ遠のやまの端

いつまての冬の名殘りかしらゆきの　今井　元子
きさらきそらになほもふるなり

とけ初めし氷りもけさは結ほれて　槇本　琴子
春なほさむくおもほゆるかな

うぐひすも春を空目とたどるらむ　村上　岩子
またさえかへる春のやまかせ

春あさみまた里なれぬうぐひすは　安井うめ子
なけども今日は雪そふりける

春ながらまた雪さそうかせの音に　徳永萬壽子
立ちもさられぬうづみ火の元

春はたゝ名のみにたちてふく風の　仁井田とみ子
みにしみとほるきのふけふ哉

春のきるかすみの衣たちもあへす　山田　障子
もとの雪けにかへすかせかな

春きてもまだゆきさそふ風さむみ　春野　梅子
とけし氷もむすばれにけり

寒けさのあまり早くもゆるひしは　及川千尋子
今日近えかへる驗なりけん

此の朝け北吹きかはるはるかせに　横川須磨子
郷の春もとゞこほりけり

うちみれは霞みもやらす風さえて　宮島靜江子
ゆきけにくもる春の此のころ

春たてとかすみもあへす風さえて
ふゆにかはらぬきさらきの空　宮島美栄子

さえかへり春をよろなる寒けさは
雪ふるとしのこゝちこそすれ　村松みち子

春といふ名のみたちつゝ昨日今日
うめかえしろくあわ雪のふる　瀧　か代子

やまゝゝは霞のころもよそへとも
なほはたさむき春の夜半かな　李家貴賓子

春來ぬと思ふはかりにさえかへり
梅か香れくるかせもさむけし　櫛田よし子

春かせに池のこほりもとけにしを
またも結びしけさのさむけさ　榊原八千代子

春立てとなは風さむしけふもまた
雪やふりこんきさらきのそら　伊藤　錦子

燈火のきえつるねやにゆめさめて
春とはいはすはだのさむけさ　楢崎　縫子

淺みどりかすめるそらの風さむく
ふりつゝきゆる春のあわゆき　楢崎千登世子

さえかへる木のまの風のあつさゆみ
はるともしらすしら雪そふる　森　琴子

二月やかすみもきえてすみのえの
まつ吹く風もさむきころかな　森　國子

春風にとけにしものをたまくしけ
ふたゝび池のみつこほりけり　森　雪子

佐保姫のかすみの袖やいかならむ
かせなほさむし春はきぬれと　内田すゑ子

春といふ名のみたちつゝなほさえて
ゆきけもよほすきのふけふ哉　内田　鶴子

うめか香をとめて鶯來鳴けとも
今朝池の面はうすこほりせり　西元とも子

春たてどふゆにもまさる寒さかな
こゝろ長閑におもひしものを　金子はつ子

さえかへり風そ身にしむもゝち鳥
さへつる聲はのとかなれとも　土肥　仙子

春かすみたつかと見れは風さえて
うめさくえたに雪はふりつゝ　小町谷里江子

あつさ弓はるたちぬれと風さえて
みをいるはかりさむくも有る哉　小町谷蘭子

鶯はたにの戸いてゝ來たれども
殘るさむさにはつねもらさす　大谷津こと子

朝な〳〵うくひすこそは來なけども　植木とよ子
吹きくる風はなほさむきかな

春立てど朝吹くかせはいとさむく　石川すけ子
咲ける花さへみなしをるなり

春風の吹けどもそらはさえかへり　萩原　璋子
ふゆの寒さにおとらさりけり

さゝ波やひらの嶺おろし猶さえて　青羽　逸子
こほりにかへる志賀の浦なみ

春といふ長閑き名のみまつたちて　青羽茂枝子
もえぬやなきにさゆる山かせ

梅の花にほひはかりやはるならん　田巻秀代子
かすみもさゆる風のさむけさ

朝かすみ立てるを見れど春なれど　長山　孝子
にはの池みつなほこほりけり

梅のはなさきぬと立ちし木の下は　澤野　芳子
また近えかへる風そ身にしむ

春きてもなほはださむきあわ雪は　碓井　信子
いつまで冬のなごりなるらん

玉くしげふたゝびさゆるはる風は　碓井　武子
冬にもまさるさむさなりけり

春はたゞ名のみなるらんさえ歸る　鶴山つる子
身にしむ風のこぞにまされど

きのふまではのみえながら忽に　鶴山とみ子
又なつかしきうつみ火の元

さえかへりなほふる雪にわか衛は　羽室　象子
春ともわかぬこゝちこそすれ

梅か香をさそふはる風さむけれは　河田ふく子
たちさりかぬるうつみ火の元

春ながら風も身にしむきのふけふ　河田いし子
かすむと見えてあは雪のふる

きえのこるふもとの雪に消かすみ　壺井美幾子
立ちかさねてもさむき頃かな

つくばねの高根は早くかすめども　服部かずえ子
なほ風さむしききらきのそら

なか〳〵に冬より寒しきのふより　師岡千代子
たちにし春や名のみなりけん

風さむみけふも雪けのいろみえて　大淡　紫子
春をよそなるききらきのそら

埋火もまたなつかしくなりにけり　下村　貞子
吹く風さむききさらぎのそら

かせ寒み岸のやなぎのあさみどり　矢野うめ子
映るかはせもかつこほるなり

脱ぎ捨てし衣もけさはきさらぎの　北川はな子
空ともいはずさえにけるかな

春きぬと人はいへどもやまかせの　三島みさ子
冬にもまさるけふのさむけさ

春なれどみにしむ風のふきくるは　佐々木常子
すきにしふゆの名殘なるらん

春きてもなほもさむさは殘るらん　森山英子
雪げにくもるきさらぎのそら

年立ちて春とはいへどわがさとは　森山以津子
ころもでさむきやま風ぞふく

けさはまた冬にもまさる寒けさに　富士村幾子
火桶のもとをはなれかねつゝ

ゆるひてし野澤の水のさらにまた　名取正代子
こほりにかへるきさらぎの空

ゆひをりてまちしかひなし春霞　田代艶子
立つかと見ればさえ歸りけり

昨日まて長閑けかりしを今日は又　田代綾子
み空さむけくあわゆきぞふる

春くれどつもれる雪のきえやらで　永井英子
やまかせ寒しきさらぎのそら

春はたゞなのみなりけりかせ寒く　青木春子
とけしこほりもまた結ひつゝ

風さむみとはむこゝろもなかり鳬　和田八重子
をかへの梅のさかりなれども

久かたの空はのどかにかすめども　藤林ます子
なほ袖さむきあさかせぞふく

あつさゆみはるの心やゆるひけん　武政常磐子
うめか香送るかせも身にしむ

山里ははるなほさむしうくひすの　内田とし子
とけしなみだもまた氷るらん

軒の梅のにほひはかりははるなから　大海原芳子
あられたはしる音のさむけさ

春日山のこるさむさに咲きにほふ　錦織さち子
花をゆきともまがひつるかな

あさはらけ霞はよもにはへども　中川みさを子
とゝ寒さの身にろしむなる

うめの花にほふあたりや春ならん　服部勝美子
なほ空さえてゆきはふれども

梅さけど空はゆきげのもよほして　北島　松子
また冬の來しこゝちこそすれ

かすみたつ春のなかめを外にして　北島　功子
たゞふく風のうらさむきかな

あたゝかく照る日の影は春なれど　北島　操子
あさかぜさむしきさらぎの頃

うぐひすの涙やまたもこほるらん　松岡　濱子
はるをうたへる聲もそらけし

春くれどつもれる深雪きえやらで　林　つね子
山かぜさむしきさらぎのそら

やまひめのかすみの袖に雪ふりて　北村　孝子
さむきや春のならひなるらん

いつまでか筧のみづのこほるらん　北村　貞子
はや軒ちかくかすみそめしに

春たてど空にゆきげのいろみえて　松原はな子
なほはださむききのふけふ哉

ゑみそめし梅には春の見ゆめれど　下　ふみ子
餘るさむさにかをりえなりぬ

このごろはさかりならまし梅の花　島田　悦子
のこりの寒さなからましかば

立ちそめしかすみも氷る心地して　鹽路花枝子
はたなはさむくみ雪ふるなり

あさはらけ霞はよもにはへども　中川　操子
なほ肌さむみはるとしもなし

さほひめの霞のそでもさらにまた　矢矧　雪子
ゆきげにかへる今朝のやま風

春ながらさむさの冬にかはらぬは　中島　丹子
吹く風さゆるきさらぎのそら

消えなんとする埋火をかきならし　竹内須美子
あまる寒さの身にしられけり

消えのこるやましたかげの泡雪は　黒瀬すゑ子
餘るさむさのしるしなるらん

三月五日兼題　出産を祝ふ

天　陸前國登米郡登米町　及川千壽子

日頃、その御事のみ、心苦しう、いつしかと待ち渡り侍りしに、よべ平らかにものせさせ給ひしよし、いとも〳〵、めでたき御事になん、まいて、生れ給ひし御子は、男君にさへおはすと承れど、嬉しさ何にかは

たとへ侍らん、やがて、すく〳〵と生ひ立たん竹の緑子の行く末千代いちじるく、今より賴もしうなん。こは御うぶ着にもと、妾が拙き手にて物せし一品、いと見苦しくは侍れど、志の程見えまゐらせたきまゝ、れくりまゐらす。かへす〳〵つきせぬ喜びは、夜さりみづからまうで侍りてきこえ上ぐべくなん。

今年生ひの宿の若竹すぐ〳〵と
千代榮ゆべき色ぞ見えける

地　播磨龍野　眞鍋直子

昨日は、いとやすらかにて、殊にをのこ君をさへまうけ給ひつとか、御やかたのうちはいふもさらにて、御里の父母の君の御よろこびや、いかばかりなるらん。こなたにても、いつしかと、ことなく生れ出で給はん日を待ち奉りし事とて、いとも〳〵うれしうてなん。うふきぬひと重ね、いと見くるしくた侍れど、御よろこびのしるしまでにとてまゐらす。よろづは、明日さふらひて、聞ゆべくこそ。おなかしこ。

人　筑前國筑紫郡下對馬村　吉村ふて子

兼ねてふくらかにれはすと承り侍りしを、昨夜御平かに、瑞き玉のをのこ子をさへうませ給ひぬときゝ侍るこそ、いと〳〵めでたけれ、御兩方さては御家のかた〴〵の御よろこび、さこそとさつし奉る。殊に御父君には、軍人をこよなう好ませ給へは、いかに御滿足にましますらんと、とり〴〵かたらひ侍り。此産衣いと〳〵見くるしくは侍れど、兆をりにと調れきはへりつれは、まゐらす、直にさふらひ申すべきを、をりわしく客のたえ侍らねは、とりあへず御祝ひことのみきこえ上くるになん、おなかしこ。

（以下原稿到着順）

山口やす子

いつかと待ちわびつゝ、ことなかれかしと祈りまゐらせしに、昨日やす〳〵と產のひもとかせ給ひて、御れはりもなうたひらかにれはしますこそうれしう侍れ。とりわけ玉のごときをのこ御子にて、生ひ立ちよりれはしますとうけたまはり侍れど、いかに御喜びましますらん、速かにまゐ出て鯛の御祝ひ申し。聞ゆべく思ひ侍りしに、折から何やかやと取まぎるゝことどもさむらひて、今日までえまからず、こは珍らしからぬ物ながら、早岐より昨日登り、まだ新らしき鯛なれは、風味よからんとぞんじ、二尾に、

只今思ひ出のまゝ讀たる歌、かきちらしたる短冊一ひらそへ侍て、心斗りの御よろこびまでにまゐらす、になん。猶よろづ御祝ひごとは、ちかく／＼さぶらひて、きこえ上げまうすべくこそ、あなかしこ。

福原鼓子

いと目出たくもきのふ、刀自の君には、やす／＼御身別あらせられ、御二所とも、すこやかにまして、ことに玉のやうなる男子にさへあらせ給ふよし、皆の君にも、さぞかし、いたくよろこびせ給ひつらん。とく妾もまゐりて、千代のほぎことをきこえまつらまほしう侍れど。先つたなき筆にて、幾め代と、限りなく、いよ／＼めでたくねひゆかせ給はんことを、ひたふるいのりまゐらせてなん。

絹二まき、こはいとしつ方にて、れもはゆしき品に侍れど、御産着の料にまで、さゝげまゐらするになん、あなかしこ。

佐々有鄰子

秋風れもむろにふきて、空のけしきのどかなる朝日の豐榮登り、天の戸押ひらくがごと、産殿(ウブヤ)に生ませるひな鶴なすみどり兒は、松の木高く、竹の八千代に、梅花のかぐはしき名を、一天四海に薫しますらん、乳母(オモ)湯母(ユオモ)をして、養(ヒダシ)まつりますらん、狹名田(サナダ)の稻を甜酒(タムサケ)に醸(カモ)し、淳浪田(ヌナタ)の稻を飯(イヒ)に爲して、饗(アヘ)したまふなるらん、あなめでた、あなよろこぼし、今日の出産。

木川里子

平らけく安らかに、御兒産ませたまひ、ことに男子にさへれはすと承る、妾がよろこびは、申しわけん樣もなくなん侍る。父君母君の御心に似たまひて、御家の風も、今日よりふきそめ、行く末は月の桂もをり給ふべく、千代かけて榮ゆ行べきあらましも見ゆ、いと／＼たのもしく、御やからの御幸ひ、一しほに侍らん。この品、見どころなくは侍れど、御祝のしるしまでに、さゝげ侍りぬ、収め給はゞ、こよなき本意にこそ、猶明日參出て、萬きこゆつべくなん。めでたく／＼かしこ。

長谷川はる子

かねて、此月はと待たせ給へりしもしるく、よべは家刀自の君、平かに身をわかたせ給ひつとうけたまはるだにいと／＼嬉しきに、わきて男君にさへれは

しますとか、目出たしなどはよの常なりや。まことや、さき草のみつはよつはに殿づくりして、月の桂もをるばかり、家の風をも吹かすべく、事あらむときは、天皇のみたてとなりて、やまと雄心ふりおこし、言擧けせず取りて來ぬべく、且は敷島の道にも入り立ちて、これにも彼にもおぼろげならで、日本魂さとりかしこき後の世の鑑ともなるべきは、此うぶやに初こゑ高くあげたる、松のみどり子にこそあるべけれ、あなめでた、かぞいろの君の御よろこびは、いかばかりかと思ひやり侍りぬ、さては其折にとて、調じたき侍りつる産衣一くだり、ことほぎのしるしにまゐらす、心ばかりのいふかひさは、さるかたにゆるし給ひてよ、なほ近きが程まゐ出で、よろづきこゆべくなん。あなかしこ。

岸　せ　つ　子

かねて、御産月とうけたまはり及びぬる彌生のそらも、日に〳〵のどやかに、花鳥の色香なつかしうなりまさり侍るを、いかゞおはしますらん。何も〳〵たしなみ深き君にはおはしますものから、なほ初めての御事にしあれど、いとやすからず思ひわたり侍りしに、きのふ辰の刻ばかりに、いとも〳〵安らけく、女の君を擧けさせ給ひぬとうけたまはる、めでたさなに〳〵か加へん。嬉しさなに〳〵かたとへん。ふつゝかなる宿の子供は、はや抱かせ給ふようねがひてよと、せちに乞ひ侍るもをかしう、げに類ひもなきみよろこびは、濱のまさごの數〳〵書きつらねんも、言の葉たるまじうなん。御方々のみよろこびやいかばかりおはすらん。まして御祖母君のおぼしめしこそ、思ひやられ侍れ。こはいとかろらかなる品には侍れど、御祝のみしるしまでに、さゝげまつり。ぬよろづは、目のあたりにこそと、とりあへず、みことほぎ聞上げたてまつるになん。あなかしこ。

土　肥　仙　子

さらぬだに、はじめての御産なれど、よそのことゝはおもひもやらで、きのふけふいかゞとばかり、こゝろもとなく思ひ候ひし折から、御使たまはり、御安産なりきと御しらせの一言に、飛びたつばかりのうれしさかぎりなく、且つその子の君にてさへおはすと承り、一きはうれしく、けふよりは、國の寶をまうけ給ひしよなど、こなたざまにも、よろこび

らするはせなるに、ましてや、御いもせの君の御よろこびは、いかばかりかと、おしはかりもやられずなん。このみいはひのしるしには、いと見ぐるしう侍れど、御うぶき一かさねさゝげまほしうて、いまだ生れさせ給はぬ先には、男君とも女君とも定めかかき物から、まづをの子の君のをと、つたなき手にて調し出きしに、おもひの如く拙なき心のほどかなひ侍りしこそうれしう候へ。こをめしたまはれど、こよなきよろこびにして。なほ、おすはさぶらひて、母君ちごの君の、はね〳〵しき御顔を拜して、よろづきこえ候はむと、とりあへず、けふのめでたさをいはひ奉りて、かくなん。穴かしこ。

田巻ひて代子

うけたまはれば、嫁の君、ゆふへ安々と御男子御出産あそばされ候由、御成長の後は、天晴なる軍人となりて、御國たてとなり給はんと、誠に〳〵御目出たく御いはひ申上候、皆様の御よろこびは、いかならんと御れし斗り參らせ候、早速まゐいてゝ、御祝ひきこえ上ぐへきなれど、御取こみと存し、わさとさしひかへ申候、此品あまりはつかに候へとも、御産衣の料にもなし給はらは、うれしきかぎりに候、いつれゆる〳〵御伺ひ御よろこびきこえあくへく候。あなかしこ。

長山孝子

うらゝけく打かすめる峯の松のかはらせ給はて、御許には男の御子をあげさせ給ひぬと承り、ひな鶴の千代のよろこび、いとめでたくいそぎさふらふへきなれと、學びの庭のかれこれといそしく、ひましなけれど、祝ふ心の片はしもと、扇子に不二の山をゑかゝせ、行く末ひろく御名高かれと、まゐらするになん、かしこ。

有馬たね子

白金もこがねもなにかは、玉のやうなる子寶、いとやすらかにうまれいでさせ給ひ、殊に男子にさへおはしますとか、いと〳〵めでたう、うらやましきかぎりにこそ、かぞいろの君のおんよろこび、さこそとおもひやられ侍り、さるは、いろ〳〵のおんうふやしなひとも、きら〳〵しういつかせたまふらんうちに、おもてふせにははへれど、かたはらいたき産着一くだり、二葉よりときはのいろの松にかけて、

君が開生のねざし萬代までもと、たゞへまるぞかし。なほとくまかでて、うひ見參つかうまつるべくなん。あなかしこ。

服部かずえ子

かねてふくらかにおはしますとうけたまはり侍りつるに、よべなん、うつくしき玉の様なるみ子、殊に男子君さへ、やす／＼とうまれ給ひしとか。さぞや、夫の君を始め、御老父母君にいたらせ給ふまで、初までを見たまふ御ことなれど、御喜びの程、さこそと思ひまゐらせて、いとも／＼めでたき事になん。その折にとて、事足はねど、てづから調じおきつる產衣一くだりまゐらす、心ばかりにいひ甲斐なきは、さるかたにゆるし給ひてよ。今よりは、御身をすこやかにたもたせ給ひて、和子君を育くむわざ、ゆめなおこたりたまひぞ。ひたすら、家庭教育に範となり、賢母の鑑となり給はん事こそ、かへす／＼もねがはしき事なれ。萬はさぶらひてきこゆべきを、おやにくわさまだきよりまらうどの絶えまなければ。まづかく祝ひきこゆるになん。

三谷起美子

春立つといふも名ばかりにて、北の越路は寒しといへど、いかに昨日今日を過させ給ふらむと、申し合ひ侍りし折から、なつかしき御文の便りに、取る手も遲しと、讀みもてゆき侍れど、姉君には、過ぎし日、めでたき玉の男御子を、やす／＼と生ませられて、つゆの御障りもあらせられず、まして、御子は輝くばかり、日々にらうたく生ひ立たせ給ふと、承り侍るよろこびは、何に例へんすべも候はず、げに御名にちなみて松の葉の、千代萬代も、常盤の色にさかえてましまさんことは、今よりさだかに見え侍りてなむ。されど、御いはひの印までに、數ならねども、松が枝に鶴の遊べるかたを織り出し、自ら心をこめて縫ひ上げし產衣一くたりまゐらすれど、かりそめに御手を通し給はゞこよなき幸になん。あなかしこ。

名取正代子

しばしみけしき給はらざりつる間に、かねてまたせ給へりし松のみどり子の、鶴の初聲いとゆたかにうまれいでさせ給へりとうけたまはるなん、いと／＼めでたきや。御親君たちの御よろこびはいふも更な

り、御祖母の君には、うひみまでにましませたい、かたかりよろこび給ひぬらむと推しはかられ侍りぬ。さて此きぬ一まきは、御産衣の料に、鯉一尾は、子持の君にごらんせさせ侍り、いつれわすわさての程にもまゐのぼりて、よろこび聞ゑわぐべきも、先うれしさのあまりに、かくなん。

千年へむ朔ころ見ゆれ高砂の
をのへさかゆる松のみどり子

あなかしこ。

坂田きみ子

兼て此月はと、またせ給へりしを、よべ、いとやすらかに、玉の如きをのこうまれさせ給へりと、承り侍りいとも嬉しうよろこび聞ゑまゐらす、まして御二方をはじめ、御やからの御よろこびは、そもいかたかりぞや、今よりは、千代八千代、いよ／＼常盤かきはに、かはらぬ呉竹のみどりゆかしき其竹の子の、れひそめて、親にそむかぬてふめでたき根ざしかためさせ給へる御うれしさよ、何をかくらべ侍るべきや。さて此肴一籠、御うぶやしなひの験までに、ごらんぜさす、御七夜も過ぎ侍らむ、まゐりて、よろこび聞ゑわぐべくと、つたなき言の葉のみかくなん。かしこ。

藤林ます子

昨夜は、御嫁子様御安産遊ばされことに此度は御男子に渡らせられし由、わきて父君の御喜び、さこそと御察し申上奉る。こなたにても、いつしかぞ御噂のみ申し居し事とて、一しほ嬉しうなむ。御父君の御志受けさせ給ひ、御成長の後は、天晴御國の大丈夫とならせ給はむ事ぞと、只今より御末樂しく、萬々御祝ひ申上奉る。就ては此品粗末ながら、御祝ひのしるしとして進し申上候、先は御出產御祝ひまで、あら／＼申述るになむ、あなかしこ。

武政常磐子

くさ／＼の寶にまして寶なるは子なりとかや、寶に其家何程富めるも、誠の子のなかりせむよしや浪風立たぬも何となくしめり勝なるは世の常なり。されど、上下をとはず、すこやかなる子をあけ、成長の後は、それ／＼國の爲にもなれかしと、願ふところなれど、不幸なる人は、實子を見る事能はずして、一生を送るなり、これ等はあはれむべき限りにこそ

ありけれど、學校のゆきゝにも、たわむれに語らひし事もありけるが、業を卒へし後、君は幾程もなくして、名譽の高きかたへとつがれ、いよ／＼婦人の道を丶こたる事なく勉められ、世のかゝみと、人のうはさする程に至りけれど、なつかしさの日に増りて、今日しも文のたよりのあれかしと、空をながめ、心に待ちつゝ、机に向ひ、女鑑など取出し讀みつゝ有りしに、郵便の一聲、もしやとせわしく立ち出て見れは、表書はいつも替らぬ水くきのあともやさしき君なれど、心もそは／＼讀みけるに、こ度やすらかに御產のひもをとかれ、殊に健かなる男子をあけさせられしと、細やかなる言の葉、くりかへし見れはみる程なつかしく、うぶ子の顏さへ、折々むねにうかふもをかしや、妾も、近き內、祝ひがてらまゐ出て、常々のうとさをも詫ひ、積りし噺しの万の一もと、そを樂しみ居れど、かりにも產後の障りなどなき折、又はみどり子に虫氣など無き樣發ふこそ、君のつとめなれ、あなかしこ。

内田とし子

よべど、御娘子樣、御安產にて、殊に男君にましますし由、一しほのおめてたさになむ。皆々樣の御よろこびはさるものにて、私どもゝ、かねて今月と承り、ことなう生れ出で給はんことをのみ、いのり居し折柄とて、殊更心安うおぼえ侍り、御うぶ衣一かさね、粗末なるが上に、いそぎ調せしものなれど、いと／＼見にくうは侍れど、御祝ひの志るしまでに、進めまゐらす。なほ近きうちにさふらひて、よろづきこえあぐべく、まづは御祝ひまで、あなかしこ。

錦織さち子

嫁君、御身重う渡らせられ、かねて今月とて、いと／＼案じ侍りにし折から、昨日は、安々と御產の緒御解き遊ばされしよし、殊更男君との御事にて、御父君のかざしの花と、御いつくしみのほど、さこそと推し量り侍りぬ。蔭にても安かれとのみ祈りし甲斐ありと、御悅びの御噂のみいたし參らするになん。さて御產衣一かさね、いと見苦しう侍れど、御悅びのしるしまでに進めまつる。よるのもの丶御めしかへともなし給ひなど、嬉しき限りにこそ。かねて調へおかんと存じ侍りしかど、生れ給ふは男の君とも女の君とも分き難く、それ故見合せ侍りしが、昨日

承はるや、昨宵よすがら只管にあせりつゝ、願へしものから、縫ひざまなど、何かとしどけなきは、幾重にも御詫び申しまつるになん。此の上ながら、御母子の君は、一め御心添へのほど、神かけていのり参らす。余は、近き頃にさぶらひて、よろづ御悦びこと聞ゆべくなん、かしこ。

服部かつみ子

よべは、御姉君さま、安らけく御産遊ばせし由承り、妾のよろこび申上げんやうもなくなん。兼て御さん月と存じ居候まゝ、いたく御案じ申し居しに、思ひの外平らけくことに男子にて御在すときゝ侍るを、御全家の御幸ひ、さては御里の御ふたかたさまの御よろこび、一しほと存じ申候。此うぶぎ一重ね、けさよりいそぎぬひ上げ侍り御よろこびのしるしまでに進じ参らす。何れまたの日さふらひて、よろづきこゆ上ぐべくなん、あなかしこ。

北島松子

姉君のみこもらせ給ひしより、かぞいろはの君には、わけくれ御身安かれ、早う初孫の顔見たやと、御年寄られし身のふり行くを忘れさせ給ひての、日頃の御物語り、妾も早う姉君の身二つに成らせ給ふやう、神かけて念じ侍りし甲斐にや、只今は、最もやすらかに、御産の紐を解かせられ、御二方とも、恙なうわらせらるゝよし承り、殊に和子は男子と聞くは、うれしとも嬉しき限りなむ。實に千代に八千代の末かけて、御壽き申上ぐるになむ。父母の君には、取り分け御滿悦の程、御けしきに溢れ、かたみかはりにわな目出度や嬉しやと、心も空に、何事も御手にはつかせ給はぬ御有様、げに姉上へみそなはせ参らせたかりしよ、何々はまかれ、まかりて御壽聞ゆべきれにし、知し召す如く、公に仕ふる身は詮なき、何れ明日は父母の君と共に候ひて、悦び聞え奉るべくなむ。あなかしこ。

松岡濱子

よべも、御安産あらせられ、殊に御男君との御事、御やかたの御よろこび、いかばかりかと、御察し申上候、かねて此の月と承り、御初産の御事とて、御案じ申し居り候ひしを、かく安らかに生れ出て給ひし御事、誠にや御目出たさのかぎりにこそと、皆々相悦び申上[illegible]。つきては、御よろこび

のしるしまでに産衣一重、いと／＼みぐるしく候へども、御祝申上まつりぬ、御納め下されかし。あすは早うさふらひて、よろづきこゆべくなん、かしこ。

北島功子

いにし日は、いと安らかに、御産の紐をとかせ給ひし由承り侍りぬ。其後は、御血でゝろもなう、殊に擧げさせ給ひしは、御男子様にて、いとも／＼御健かに渡らせられ、いよ／＼目出たう常盤の松の幾千代かけて、鶴龜の齢にもあやからせ給ひてよと、かつ／＼ことほき奉るにこそ、御良人の君には、いはでもしるく、とり分け御老人様には、初孫様の事にしましませば、さぞやさぞ、御氣を忘れ給ひて御喜びの程、さこそと推しはかられて、またなく御目出度き限りになん。遠近の山には、霞の衣に包まれて、谷より出つる鶯も、軒端の梅に囀り、いと長閑なる候としも成り侍りぬれば、御肥立の程も、速かにわはしまさんと、存んじ上げ侍るになん。いと嬉う思ふ餘り、拙き筆をも顧みず、文してかくは御悦ひ申し上ぐるになむ。あなかしこ。

北村てい子

御嫁子様、兼て御妊娠と承り、御案じ申候折から、昨夜は、御する／＼と、御安産遊ばされ殊に玉のやうなる男御子の由、今よりは行く末御たのもしき御事とかさね／＼御目出たく存し候、此方にも御同前に重荷をおろしし心地致し打より御悦ひ申上候、猶明日はさふらひてよろづきこゆべく候、かしこ。

内田すゑ子

さきの夜は嫁御様には、安々と女子産ませられ、御肥立もすくれ給ふよし、かぎりなくめでたう、みなの君の御よろこひ、さこそと察し奉る、まことゝ古よりはしめては女をよしとすところやすなれ、おのれ同氣相求むとて、いと／＼嬉しう、行く末の御教育なんとおもふにも、げにたのもしうれは候、母君のめでたき御教へに生ひ立ち給ひ、名にしおふうめ子の君の御操たゝしう、あはれ文明の母君とならせ給はむほど、今よりわれもひしられていとゆかしう、かりそめにもみ參らせたうおもふを、海山へだつる身のいかに侍らむ、たゝ御うつしゑはやうとねぎたてまつる、なほ産婦の君、御保養をなをこたらせ給ひそよ、めでたうかしこ。

下ふみ子

かねて此月はと待たせ給ひしもしるく、昨夜いとたひらかに、千歳經ん松のみどりご生れさせ給へりとうけたまはる、いといとめでたう、うらやましさ限りなく、君が闔生もなは幾萬代の根ざしかためさせ給ひて、君の御よろこびいかばかりかと思ひやり奉りぬ、なはわすかあさての程まゐ出て、玉の如くうるはしき御初顏を拜し奉りたくてなむ。

黒瀬すゑ子

かねて御けしきたゞならずと承り居候ものから、いかで安らかにと、神かけていのりまちわたりしかひありて、きのふはいとたひらかに、千年へん松のみどり子生ひいでさせ給ひしとなん。皆々樣のれんよろこび、いかばかりかと、いと〳〵御うらやましう存じ侍り、ときはかきはの色ふかき君がそのふも、かめのよはひのいく萬代ののちまでも榮えさせ給はんこと、かへす〳〵れんめでたきかぎりにこそ。いつれ近きほどにさぶらひて、かず〳〵はぎこと聞え上ぐべくなん、あなかしこ。

矢矧雪子

年立ちてより、月日のすぐるははやきものにて、今はやよひの始となりにけり。四方の霞も長閑に打ちなびきつゝ、谷の戸出づる鶯は、いと待ちわびたるたもゝちにて、梅の梢に來りて、いとゞあはれになきつるもいとをかし。さてうけたまはれば、先づ日は、やす〳〵とみ子うませ給ひて、殊にをの子とうけたまはるなん、いと〳〵うれしく侍る。何れも樣かたの御よろこびはさる事にて、吾らいつしかと待ちわたり侍りて、事なくれい出で給はん事を祈りまゐらせしかひありて、人々と共によろこびあひ侍り、今の世は人々をの子をのみうまん事を祈る世に生れし御子はをの子にましませど、誠にうれしく侍りぬ。御子樣は末頼もしきますら男と成り給ふらんと、いと、かしこし。されどいと見ぐるしく侍れども、御うぶぎ一重御祝ひの志るしに、かねてとゝのへれくべきを、實はをの子とも女子ともわきがたくて、其れゆゑ見合せ居てうけたまはりてとみに調せさせ侍れどぬひざまなど、いと志どけなく侍らん、まづは御よろこび申しあげたく、何れ近き内にさふらひて、よろつきこゆべくなん、かしこ。

大喪を悼み奉りて

女子高等師範學校
川島よ志子

かけまくもかしこき、　皇太后の宮には、こぞの冬より御心ち例ならず、おはしますよし、もれ承りしより、數ならぬ、我らすら、くるとあくと、思ひをこがし、一日も早く、御こゝろよう、ならせ給はんことを、いのりまゐらせし、かひもなく、此春よりは、御病も、とみに、あらたまりて、日にそへし、重うならせられしかど、いとゞ、心も、こゝろならざりしを、さるべきにや、おはしましけむ、いにし、十一日、遂に、崩御遊ばされしよし、仰せ出されし、いとゞ、かなしき、きはみになむ。

あゝ、先皇の、そのかみを、思ひまゐらすれど、いとゞ、御いたはしき御事、多きのみならず、四方のなみ風、志づかならで、世のさま、何となう、例ならざりしかど、ことを、をさめ給はむの、御心深く、いみしむ、御心を、なやまさせ給ひしを、　皇太后の宮には、絶えず、御側にあらせられて、其御憂を、分たせ給ひ、日となく、夜となく、共に、御心を、なやまさせ給ひしよし、承るも、いとかしこきに、先皇には、遂に、なかばなるやうにて、崩御あらせられしこそ、いかばかり、口惜しう、思召しけめ、されど、御志は、むなしからで、今のみかど、よく、其御志を、つがせ給ひて、外は、とつ國と、交を結び、内は、いさ〳〵の業を、おこさせ給ひて、世を、平になし給ひたるは、本より、御德の、よのつねならぬに、よるとはいへ、また、　皇太后の宮の、御内助の御德、すぐれさせ給ひけむ事と、察しまつるになむ。かく、明らけき御代となり、今や、　天皇の、三十年祭を、擧げさせ給はんとするに當り、遂に、かくれさせ給ひしこと、思へど、あはれとも、かなしき、きはみになむ。

あゝ、今より後は、御すがたを、拜しまつるによしなし。あめの下は、みな、すみの色に、そめ渡して、昨今、そゝぐ村雨さへ、なみだとのみ、まがへられ、見るもの、聞くもの、たゞかなしみの、たねならぬはなし。あゝ、いかにせん、今は、せんすべもなし。たゞ、かしこみ、つゝしみて、哀悼しまつらんのみになん。

女鑑第百貳拾七號目錄

（明治二十年四月八日內務省許可）

社告

○代價は通貨又は郵便爲替小爲替銀行爲替及通運にて本社へ御直送之事○郵便爲替は東京銀座郵便取扱所へ御振込可被下事○郵券を以て代金に換用せらるゝ時は一割增の事○別に領收證を出さず金員領收の上は直に女鑑を發送すべし若強ひて領收證を要せらるゝ方は別に證書郵送料御送附の事○未納稅の來書は一切受取不申候事

女鑑
每月五日廿日發行

定價			廣告料
一冊	六冊(三ヶ月分)	十二冊(半年分)	五號活字廿三字詰一行金二十錢
十錢	五十五錢	壹圓	
全國無遞送料			

明治三十年三月十四日印刷
同年三月十六日發行

發行兼印刷人　東京京橋區築地二丁目二十一番地　川崎直衞
編輯人　同　山根勇藏
發行所　同　(電話番號本局八八)　國光社